

---

# ハヤテのごとく next

謎沢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハヤテのごとく next

### 【Nコード】

N0127J

### 【作者名】

謎沢

### 【あらすじ】

ハヤテのごとくの二次創作です。アニメのノリをそのまま、さらにdevelopさせてみました。

一体、執事、ハヤテに何の不幸が降りかかってくるのか！

## 第1話 激的ビフォーって、今回は部屋を…！

さーて、神に代わって、神2番さんがナレーションをしようかなって、要は、謎沢が神のキャラクターを崩壊させたくないから神2番さんをお願いしているのかあ…。

えっ、くだらないまえがきのものは終わりにして、さっさと始めるだ…。

じゃあ、アニメ版みたいなのでサクッと始めちゃいますぞ…。

練馬区、それは、東京都の端っこに位置するとされる区である。えっ、多摩は東京じゃないのかって？それは気にしない、気にしない。そして、練馬区の約半分以上を占めている三千院家では、今日も、ナギがニー 生活をしていた…。

「ハヤテ！」

ナギがハヤテを呼びつけた。

ハヤテがすぐにくると、ナギのまえのテレビでは、某六本木にあるテレビ局の人気リフォーム番組が流れていた。

そして、ナギはそれをみながら、ハヤテにこう言った

「ハヤテ、この三千院家もリフォームするぞ！」

「でも、その番組に登場しているような、極少住宅に住んでいる訳じゃないですから、リフォームしなくとも…」

「ハヤテは甘いな！」

そーいうと、テレビのビデオデッキを一時停止するとすぐに部屋を飛び出した。

「待ってください、お嬢様！」

ハヤテも急いでナギの後を追いかけていく。

ナギはハヤテの部屋の前に立つと、ハヤテの部屋をいきなり開けた。

「お嬢様、僕の部屋を開けては困ります」

ナギを追いかけてきたハヤテがそう言った。いつの間にか、マリアさんまで付いてきている。

「ハヤテの部屋は、こんなに薄暗くて、狭いじゃないか！」

「いや別に、小さくなんかありませんよ。」

ハヤテは否定した

「いや、狭いから、ベッドの下に雑誌を詰め込むのだ！」

ハヤテとマリアさんは、ハヤテのベッドの下を見た。確かに、ベッドの下には、見覚えのない雑誌があった…。

そう、一部のアニメ視聴した大きいお友達なら、この先、何が出てくるかは、頭の中に想像できよう。

そこにあっただのは、ホワイトタイガーのくせして、日本語がベラベラ喋れる、自称、ゆるキャラのタマの L 系の雑誌だったのだ。

それをナギは普通に二人に表紙を見せつけた

「ハヤテ君、そういう趣味を持っていたんですか…、確かに、女装も似合うし、思春期だからとは…」

マリアさんは、ハヤテに言ってしまった。

ハヤテはそんなものが自分の部屋の、しかも、思春期なら気になっ  
てしまうベッドの下にあったこと、さらには、マリアさんに身の覚  
えのない趣味を見られて、東京ス イツリーから飛び降りたいほど  
のショックを受けた。そして、ナギの思いつきによって、リフォー  
ムはスタートした。

しかも、あのテレビ局のあの番組内で放映してしまうという凄いこ  
とをやったのだ

ここからは、あの某六本木にあるテレビ局のリフォーム番組のよう  
に進行していきます。

-. -. -

東京都練馬区

閑静な住宅街の一角に佇む一軒の問題を抱えている家がありました。  
三千院家。

この家の抱える問題、それは、『極狭の執事の部屋』。「確かに、執事の部屋としては、とても狭いと感じていたのだ」  
そう答えるのは、執事を雇っている三千院ナギさん。

(そして場面はハヤテの部屋に移る)  
なんとということでしょう！

ベッドの下には、大量の成人向け雑誌が詰まれているではありませんか！

しかも、日中も窓の位置が悪く、部屋には光が差し込んできません。この問題のある部屋に立ち向かうのはリフォームの匠、前田伸二。  
前田は、秋葉原にあるBKA84のホールを手掛けるなどの活躍をしました。

そんな匠のことを人は、『オタクの大工』と呼びます。  
そんな匠を待ち受けるのはリフォーム対象とは対照的に広大な三千院家。

匠は一体、どんな部屋を作るのでしょうか。

オープニングがかかっていますが、ここからは次回。

今回は三千院家の欠陥と戦います。

そういえば、ハヤテはと云うと…

「マリアさんに変なものを見られた…」  
落ち込んでました。

## 第2話 撃的！！アフター（前書き）

第一話の続きです。

一部、アナウンサーがシャツベっている場面では、アナウンサーのアナウンスにカギ括弧がつけられてません。カギ括弧のついていないものは、大工もしくは、ハヤテのセリフです。

## 第2話 撃的！！アフター

さて、引越しがスタートしました。

しかし、荷物が少なく、すぐに終わってしまっていました。

早速、解体をスタート。

匠はこの部屋を一体、どのように変えるのでしょうか。

次の日、匠はあるものをもって、工事現場にやってきました。

「これはなんですか？」

それは、一枚の梱包されている板。

「これは、鏡です。」

「鏡？」

一体、これをナニに使うのでしょうか。みなさんに推理してもらう時間は、早く話を進めたいので、カットしちゃいます。

「これは、女装したときに、ご自身で確認してもらうためのものです。依頼者の三千院ナギさんから、ハヤテ君は女装が好きだと聞いていたので、楽しんでもらうために、大容量の造り付けの棚の扉の後ろに作ってみました。」

なんとということでしょう。

ハヤテ君は女装が好きだとのこと。私、アナウンサーとしては、イケメンのようにも見えて、愕然としてしまいました…。

そうしているうちに匠のリフォームはすべて終了してしまったようです。

それでは、匠のリフォームの全貌を御覧下さい。

以前は、薄暗く、陽の光もまともに入らなかった、三千院家の執事の部屋ですが、、、  
なんていうことでしょう！！

リフォームによって、日が皆さんさんと照れしてくれる天窓を大きく開かれているではありませんか！！

これで、昼間は、以前のように勉強時に電気を使わなくても、大丈夫になりました。

後ろを振り返ると、なんとということでしょう。大容量の収納スペースが出来ているではありませんか、片側には本が大量に入り、もう片側には、衣装が大量に入ります。

これで、雑誌を床に隠さずに住むようになりました。

さらに、衣装ケースを開けると、鏡が出てきてはありませんか。

「これによって、気軽にコスプレをできるようにしました。」

これによって、匠のリフォームは完了しました。

さて、ハヤテ君は気に入ってくれるのでしょうか。

.....

ハヤテ君が久しぶりに帰ってきました。しかし、ハヤテ君は、いまいち乗り気でない様子。

「うわー。あんまり変わってないようないや。」

「しかも、これだと、本棚と、衣装ケースしか増えてないようないや。てか、なんで、こんなところに、本棚を設けて、そこに青少年の教育を害するものをおいてるんですか！！」

どうやら、ハヤテ君には気に入ってもらったようです。

このリフォームにかかった費用は、1億円でした。

終わり。

「って、勝手に終わらさないでください。」

ハヤテがいきなり、作者に突っ込んできた。

そして、部屋を飛び出すと、タマの部屋に突入した。



そのとき、タマは、ネットで自分の趣味を楽しんでいた。

「この子、かわいいなあ……。」

タマが、香気に無防備にしているとところにハヤテが突っ込んできたのだ。

「タ……マ……。」

ハヤテは、タマがハヤテの部屋に雑誌を置いていることをこの時、確信したのだった。

その後、タマの部屋に本棚は移されたそうなの……。

こんどこそ、終わり。

## 第2話 撃的！！アフター（後書き）

ありがとうございました。

今後も、まだまだ展開していきます。

感想などは、随時募集しています。よろしく願いします。

### 第3話 料理対決アニメって少ないっすよね？

ドタバタが落ち着いた頃。

ハヤテのところにある男が近づいてきていた…。

「ハヤテ。」

「はい、お嬢さま。」

ハヤテは、いつも通り、ナギの世話をしていた。

「ハヤテは、もう、ぜ、絶対にここからいなくなってしまうないんだよな。」

「はい。」

ナギの聞いたことに、少し疑問を持ちながらも、そうやって、ハヤテは答えた。

しかし、ナギには何かを感じていたらしい。

それは、ナギ以外にも、伊澄いすみも感じていた。

伊澄はハヤテのことを心配した。

そして、ついに、その時がきてしまった。

ガッシャン。

何か、ガラスが割れる音とともに、館内が暗くなった。

「いったい、どうしたんでしょうか。」

マリアがそういった瞬間、目の前に矢が刺さっていることに気づいた。

「ひゃー。」

悲鳴を聞きつけたハヤテがマリアのところに向かった。

「大丈夫ですか。」

ちょうど、駆けつけたときには、何故か電気が復旧していた。「ええ、でも、それ…」

マリアが指差した先には矢が刺さってた。

三千院家の警備は厳しいはずなのに、なぜこの矢はこんなところに刺さっているのだろうか、そして、一体誰がやったのであるうか。

「あっ、矢の中央に紙がくくりつけてありますわ。」

「本当ですね。開いてみましょうか」ハヤテが手紙を開くと、そこには、デイナーの招待が書いてあった。

しかし、そこには、執事とご主人様限定で、その他の警護の入場は禁止と書いてあったのだ。「ちょっと、これは、怪しいですね…」

ハヤテがマリアにそう言ったときに、丁度、ナギが部屋に入ってきた。ナギは状況が読み込めず、ただ、ハヤテと2人つきりでデイナーに誘われたということだけに目がくらんだ。

「ハヤテ、それはいつなんだ」

そういうナギに

「いや、明日と書いてあるんですが、いかにも、この状況で来たってことは、何か、お嬢様を狙ってるのでしょうか…」

ハヤテがそう言ったのを遮るように、ナギは、

「それ、行くぞ！」

と行く気満々になってしまっていた。

マリアも、心配して、ナギに言った。

「でも、ナギ、もしかすると、もしかしなくても、罠であるかも知れないんですよ。」

しかし、ナギは、

「大丈夫、今まで、ハヤテが何度も、苦勞を乗り越えて、私を守ってくれたではないか。」

と引かなかった。

結局、いつも通り、ハヤテに任せることになってしまったのである。次の日、ハヤテとナギは、屋敷を出て、怪しい招待状に書かれた場所、東大泉二丁目に向かった。

つて、東大泉二丁目って、あのプリ ユアヤド ゴンボールのアニメの製作会社の場所じゃあ…！

そんなツツコミはどうでもいいとして、その場所には、明らかに、

無断で撮影所内に設置した館があった。

「いらつしやーい」

不気味な雰囲気似合わない、昔のギャグが中から聞こえてきた。そうかと思うと、目の前に、老人が姿を現した。

「ひやつ。」

ナギが驚いた。

ハヤテは老人に、

「なぜ、僕たちを招待したのですか!」  
と訪ねた。しかし、老人は

「まあまあ、中で食事をしながら、」  
と、中に入るように言ってきた。

ハヤテとナギは恐る恐る館の中に入った

#### 第4話 オカマって恐ろしい！

中に入った二人の前には、沢山の料理が並んでいた。

銀座に数年前に売っていたというアワビラーメンや、大間のマグロを使ったトロの握りなど、和洋中の料理が並んでいた。

ナギとハヤテが席に着いて、先ほどの話を聞こうとしたとき、老人は、再び、玄関の前に行ってしまった。

「食べてもいいのか？」

ナギがハヤテに聞いた。

「ダメですよ。もしかすると、毒が仕込まれているかもしれないですし…」

そのとき、なんと、ヒナギクと雪路ゆきじが現れたのだ。

「あれ、なんで、ハヤテくとナギがここにいるの？」

ヒナギクがハヤテとナギに訊いた。

「なんで、ヒナギクがここに？」三人で不思議がっているとき、雪路だけは、席に就いて、

「うわー、美味しそうなのがいっぱいある。しかも、ワインまで…。えへへ。」

と、先に食べようとしていた。

「待ってよお姉ちゃん。」

ヒナギクが止めようとするが、その勢いは止まらない。

ヒナギクたちもお腹が空いていたので一応、席についた。

そして、謎の晩餐会は始まった。

ナギは喜んで、寿司に手をつけた。

しかし、その横で、ハヤテとヒナギクは箸をつけてなかった。何か怪しい。

そういう気持ちで二人の中にあつた。

「うへっ！」

雪路が突然、奇妙な声を上げて倒れた。

続いて、間をおかずにナギも倒れた。

「大丈夫、お姉ちゃん！」

「大丈夫ですか、お嬢様！」

ハヤテとヒナギクは、二人の所に行った。

「はははっ、」

それを待ち構えていた一人の男が、二人の前に姿を現した。「あなたは一体誰ですか！」

ハヤテがその不気味な笑いを浮かべていた男に問い掛けた。「ようこそ、高野ワールドへ。私は、高野華男<sup>たかのほなむ</sup>。これを企画したものだ。」その男の話を遮るように、

「お嬢様になんてことを！」  
とハヤテが言った。

「ほう、随分と素直なお嬢様だとのこと。そして、その横の女も、酒に釣られて、あなたを連れてくるとは…」  
その男は嘲り笑うように言った。

「しかし、僕の計算通り、綾崎ハヤテと桂ヒナギクを残すことができた。」

「それは、どういうこと。」  
ヒナギクが男に言った。

「あなたたちを私の傘下に入れて、世界征服をするのが、わ・た・し・の・ゆ・め！なんだこりゃ！！」

「なんか、随分と使い古されたネタを今の平和な世の中で、あえて唱えますね…」

ハヤテは明らかに呆れ顔で言った。

ヒナギクは、高野の最後のオカマ言葉とギャグを飛ばされて、気持ち悪がっていた。

「さて、そんな呑気な事を言っていていいのかしら？だいたい、君たち、今は外界から遮断状態なのよ。携帯を見てみる、ポケ！」

高野の言われる通り、携帯をみると確かに圏外になっていた。

「ほら、みなさい。で、あなたたちは素直に私の傘下に入ってくれ

るのかしら？」

「そんなわけ、ないじゃないですか！」

ハヤテは、高野に向かって蹴りを入れた。しかし、高野は素早く跳ねのけた。

「私、こういう暴力苦手なのよね。っていうことで料理勝負を仕掛けようと思うの。綾崎ハヤテ、あなたは、得意でしょ。」

「はい、勝ったら、あなたには、二人を起こしてもらいますよ。」

「そんなの分かってるわ。解毒剤を持ってるわ。じゃあ、早速、勝負に移りましょう！」不気味な高野との勝負がはじまるうとしてます。って、私、神の出番、これだけかよ…



## 第5話 料理勝負！！ハヤテの戦い！！

オカマおじさんの高野によって呼び出され、ナギと雪路を謎の薬によって眠らされてしまった。

そして、ハヤテとヒナギクには料理対決をすることになった…

「課題は中華料理ということでもいいね！」

高野は言った。

「いいですとも！」

ハヤテはそう応対した。

「但し、言っておくけど、薬を飲まされたものは2時間以内にこの解毒剤を飲まないと死んでしまうからね。中華料理は僕の得意分野だ。さて、君は僕に勝てるかな！こやつらの命を懸けて、そして、三千院家の執事として！」

高野はハヤテにプレッシャーを掛けた。

ハヤテは、料理が得意だ。だからこそ、プレッシャーが掛かる。

三千院家の執事として、そして、その執事の得意分野での敗北はとてもないことである。

しかし、時はこうしてるあいだも過ぎていく。

もう、もとはには戻れなかった。

調理場に行くと、すぐさま、

材料を取りに、倉庫へと向かった。

ヒナギクも後に付いて行った。

「ねえ、ハヤテ君は何を作るの？」

「マーボーナスを…。」

「麻婆茄子？」

ヒナギクは怪訝そうな顔を見た。

「はい、中華で勝負しろと言われても、凄い料理を今から短時間で作ることは出来ませんし、だからといって、ラーメンでは、戦えな

いと思つて……。」

そして、二人はすぐさま、調理場に戻つた。ちらつと相手を見るとラーメンを作つていた。(当然ながら、三分のではない。)

とんこつスープを作っているらしく、鍋の中が、グツグツと煮立っていた。

「ハヤテ君、手伝わなくてもいい。」

ヒナギクがハヤテに聞く。

しかし、ハヤテは、

「いや、これは、三千院家の執事としての名誉もあるので、いいです。」  
と断つた。

相手は、そんなことはお構いなしに、どんどんと作業を進めて行った。

材料を練るときや切る動作は、人間業と思えない動作だった。

野菜を切れば、たちまち、空を舞つて、皿の上に乗る。

そんな状況だった。

「この勝負は負けられない。」

ハヤテもその光景を見て、中華包丁を手にとると勢いよく、野菜を切つていった。

「すごい……。」

ヒナギクはそうおもつた。

そして、時は刻々と流れて行つた。

「できた。」

ハヤテは苦心の末、麻婆茄子を完成させた。

「ほう、じゃあ、こちらも準備はできている。早速、審査員を呼ぼうとするか。」

審査員として呼ばれたのは、なんと、あの生徒会3人組だったのだ。

「おい、ハヤタ君、それに、ヒナ!!!」

いつもどおり、瀬川がそう声をかけてきた。

それを遮るように三人のそばにいた女性が、こう言った。

「君たちには、料理審査をしてもらおう。美味しかったほうに手を上げて欲しい。」

ヒナギクは、三人に向かって、

「ハヤテ君の料理のほうを選んで」

と声を上げた。しかし、その女性に、

「これは、勝負だ。もしも、勝負を妨害するようなことがあれば、即刻、失格とするぞ」

と言われてしまった。

はたして、勝負の行方はどうなってしまうのか。  
次回に続く。

## 第6話 烏龍茶がほしいときつてあるよね？

突然、生徒会三人組が現れ、しかも、その三人が審査することになった、料理勝負。

一体、どうなるのか…。そして、三人の試食が始まった。

まず、ハヤテが三人の前に料理持ってきた。

「うわあ、麻婆茄子だ」

三人はその盛り付けと匂いに感動した。

「さすが、三千院の執事であるだけある。」

ぽつりと花菱美希はなびし みきが言った。

そして、三人の試食は始まった。

「やはり、味も美味しい。」

そう花菱や、その他2人は唸った。

次に高野が作った品が蓋を被せて出てきた。

「まさか、これは!!!」

蓋を開けるとやはり、そうだった。

それは豚骨ラーメンだった。

しかし、豚骨ラーメンとはいえ、そこらの日高 や幸 苑のラーメンのレベルではなかった。

敢えて上げるなら、あの行列の出来ると云われている北海道の火頭のラーメンと互角だと思われるレベルだった。いや、もしかするとそれ以上かもしれない。

「このスープは、約10時間以上かけて豚の豚骨を煮込んで作ったものに、野菜スープを加えたものです。麺も自家製です。」

高野のそれに噛みついたのが、ヒナギクだった。

「なんで、あなたは十時間以上も調理に時間を裂いているの?。こつちなんか、1時間しか調理時間…」

しかし、審判の女性がこう言った。

「審査の途中だ。この勝負を無効にしていいのか。」  
それに対して、ヒナギクはただ引き下がるしかなかった。  
そして、三人の試食が始まった。ヒナギクやハヤテたちは三人の反応をみた。  
しかし、やはり、三人の反応はさつきと同じ反応だった。そして、  
二つの料理の判定が終わった所で、審査がスタートした。  
こちら側から見ると、どっちを選ぶかはわからなかった。  
しかし、だからと言って話掛ければ、勝負は無効となり、ナギたちの命は助からない。

「それでは、結果発表する!!!」  
司会の女性がはっきりとした口調で言った。ハヤテたちに緊張が走った。

三人は一斉に  
「勝者は……」  
と叫んだ。

「ハヤタ君!!!」  
その瞬間、ハヤテとヒナギクの肩の力が抜けた。  
「何故だ」

高野は叫んだ。  
それに朝風はこう言った。  
「だって、脂っこいんだもん。あのラーメン。」  
そして、はこう言った。

「私達の給料を払えよ。」  
そうやって給料を貰うと、  
「あー、疲れた」  
と言いながら、三人で帰ってしまった。

「しょうがない。お前たちにこの薬をやる。」  
そうやって高野はハヤテたちにあの薬を渡した。

ハヤテとヒナギクは、倒れた二人に薬を含ませた。

それから数分後。

「お姉ちゃん！」

「ナギお嬢様！」

ナギと雪路の意識が戻った。

「うつつ、私は一体……」

ナギと雪路がそう言ったとき、二人はその二人をそれぞれ強く抱きしめた。

「ななに、抱きついてるんだハヤテ！し、しかも、ヒナギクの前で。」

「

「良かった。無事で……」

ハヤテは長く抱きついていた。

同じようにヒナギクもそうしていた。

大事な人が目を覚ますということのはうれしいことなのである。

その後、4人が逃げようとしたとき、後ろから大きな声があった。

「くそ、高野め、ハヤテを我がグループに仕留められないとは。お

前はこちらで処罰する」

それと同時に高野が消え去った。

「誰ですか！」

ハヤテがさういうと闇の主はこう言った。

「はははっ、いつかお前たちを我がグループに引き抜き、この世界を支配するのだ。」

そう言ってその声はそれ以降、何も言わなかった……。

## 第7話 つばさと僕

「只今、戻りました。」

翌朝、ようやく、ハヤテとナギがお屋敷に戻ってきた。あの料理勝負が終わったのは、明朝のことだったのだ。

「あらあら、どうしたのですか、こんなに遅くなって…。」

マリアさんはそう言って、ハヤテたちを出迎えた。

「それが、実は…」

ハヤテが事情を話そうとしたとき、ナギが眠たそうに、

「私は疲れたから寝るぞ。」  
と言った。

ハヤテとマリアさんは、急いで、ナギの寝る準備をした。準備が整うと、すぐにナギはぐっすり寝てしまった。

「ハヤテ君は睡眠取らなくて大丈夫なのですか。」

マリアさんがそう言ってくれた。「はい、事情を話たら寝たいと思います。」

「一体、何があったのですか…」

そして、ハヤテは昨日から今日の話を話した。

「そうですか…。ナギが無事でなにより。」

「はい…。」

そう答えるとハヤテも寝てしまった。

「あらまあ…。」

マリアさんは椅子の上で寝てしまったハヤテに毛布を掛けた。

「しかし、なぜ、今更、世界征服なんて企んでいる人がいるのですでしょうか…」

マリアさんは疑問に思いながらも、いつものように掃除などの仕事をこなした。

それから、ハヤテが目を覚ましたのは、昼過ぎだった。

ハヤテが目覚めたときは、まだ、ナギはぐっすりと寝ていた。

「マリアさん。毛布かけてくれて、ありがとうございます。」

マイアさんを見つけると、即座にハヤテはそういった。

「いえいえ、それより、もう少し寝ていなくていいのですか。」

そう聞かれたハヤテは、返答した。

「はい。もう、僕は大丈夫です。」

「そうですか。それでは、ハヤテ君にお買い物に行ってもらいたいのですか。」

マリアさんは、そう言った。

「いいですよ。」

ハヤテは、マリアさんから買い物リストを貰って、街に出た。

「こちら!」

「うわ…部長…。」

道を歩いていると誰かがこちらから向こうへ走っていった。

「あれって、亀有の人??ずいぶんと追いかけているんだな…。」

「

ハヤテはそう思いながらも、商店街のほうに向かっていった。

商店街で買い物済まして、商店街のアーケードを抜けた時に、ふ

と、いつも通っている五叉路が気になった。

「そういえば、この先って何があるんだろう…。」

ふとそうおもった。

まだ、時間はたっぷりあったので、試しに行ってみることにした。

少し行くと、ハヤテの目にある建物が目についた。

その建物は、少し、古そうな建物だった。

「なんだろうこの建物は。」

そういうと、あることに気づいた。

「人生を占います。」

そう表札のところに書かれていたのだ。



何故か、ハヤテは相談したくなって、ドアを開けた。

「ようこそ。そこにお座りなさい。」

入って、そう言われた。

「はい。」

ハヤテは、椅子に腰掛けた。

「さて、あなたは、私を必要としてますね。」

おばあさんはそういった。

「私は。安倍と申します。よろしくお願ひします。あなたは、なぜここに来たかそれを聴かせてもらいましょうか。」

そうハヤテに聞いた。

「なぜだか、ここに引き込まれるように…。」

「いや、あなたの悩み、そう、昨日から今日にかけてあったことが不思議なんですよ。」

安倍さんは、そう言った。

「なぜ、あなたは昨日の出来事を…。」

ハヤテは不思議におもった。

「私ね。相談を受け付けているけど、カウンセラーじゃないのよ。」

その安倍さんの言葉にさらに不思議がった。

「私、魔女なのよ。」

その言葉にハヤテは驚いた。

「そんな…。冗談ですよね。」

「いや、冗談ではないのよ。で、本題に入るけど、その男たち、なんで、あなたを連れていこうと思っていると思う。」

それに、ハヤテは、

「そ、それは、地球征服。」

「そう。地球征服。しかも、普通の地球征服じゃないわ。」

「えっ、それって、どういうことですか。」

ハヤテは食い入るように聞いた。

「それはね、魔法を使った地球征服だわ。しかも、あなたを魔女にして…。」

「えっ。魔女。魔法使いじゃなくて。」  
ハヤテはそう聞いた。

「ええ、魔法使いだと、30歳を超えた独身男子になってしまおうでしょ。」

それにハヤテは、こうおもった。

『いやいや、それは意味が違いますよね…。』

「しかし、魔法使いなんて、存在するのですか。あまりにも非科学過ぎないですか。まるで、地下鉄は地球の裏側までつながっているなんていう嘘と同等レベルじゃないですか。」

ハヤテはそう安倍に言った。

「まず、そこから説明しなくてはならないですか。」

安倍はため息をついて、さらに話を続けた。

「科学って、すべてが正しいと思われるけど、実はそれは違うのよ。科学では証明できないことだってある。」

それは、人間に限界があるからなのよ。未だに原因が分からない病気だってある。物理現象だってある。それと同様に魔法っていうのもその原因が分からない物理現象の一つなの。」

そして、今、世界では科学が普及していったと同時に、他の考え、要は、欧米の自由主義以外の考えが消されようとして、それに反発する勢力が出てきた。」

その一つが、この勢力ってことよ。」

しかも、今回は残念なことにあなたと、ヒナギクという女の子をおうとしているの。」

それにハヤテはただ感心するしかなかった。」

「それで、僕はどうしたらいいのでしょうか。」

そうハヤテは聞いた。

「あなたは地球平和のため、そして、あなたの生活を守るために戦わなくてはならないわ。」そう安倍は言った。  
どうやらそれしか方法はなさそうだった。」

その後、ハヤテは屋敷に戻ろうとした。

外は綺麗な夕焼けが覆っていた。

しかし、そのあとには夜の闇が待っている。

でも、無数の星が光を出して頑張っている。

いつかは朝日が顔を出す。

そうハヤテは思った。

第8話 お台場って、いろんな攻撃を受けているよね？(前書き)

新年明けましておめでとございます。

それでは、新年第一発目から、早くも話をさらに展開していきます。

## 第8話 お台場って、いろんな攻撃を受けているよね？

さて、あの占い師に会ったときから、数日が経った。

なぜかしらないが、今日は、とても暑かった。

もしかするとそれが事件だったのかもしれない…。

「今日は、何故か熱いなあ。ハヤテ。」

そう、ナギは言った。

「はい、なんでも、今日は、気温が40度まで上がるそうで…。」

「その天気予報、本当なのか!！」

明らかに、最高気温の数値がおかしい…。

「はい。なんか、天気予報のリポーターが二人出てきて、ふざけあいなから予報していましたけど…。」

ハヤテはそう言った。

「それって、明らかに、著作権的に出しちゃいけないネタなんじゃないのか。ハヤテ。」

まあ、そんなこんなで、白皇学園に通学する時間となってしまった。

「珍しいですね。お嬢様が学校に行くなんて…。」

そう、ナギはまたまたここ何日か学校に行つてなかったのものであった。

「まあ、たまには学校に行つておかないとなと思って…。」

ナギはそう言った。しかし、なぜだか、このままハヤテと会えなくなるんじゃないかという気持ちになっていたのである。

それは、昨日の夜の夢での出来事だった。

夢の中で、ハヤテとナギは、学校に来ていた。

そして、突然、そこに隕石らしき物体が落ちてくる…。

「なんだろう」

そう思って、近づくと、そこに電子機器が落ちている。

そして、ハヤテは戦いに出て行ってしまふという夢であった。

確かに、それは夢であるし、どこかのアニメの最初のシーンに似て

いた。

そのアニメは、その後、ある動物と出会い、そして、共にパートナーとして戦っていくというものであった。

しかし、これは、現実には起きるものではない。

そう思っていた。しかし、なぜだか、その夢がナギを学校に行かせた気になっていたのである。

場所はところ変わって、東京の某所。

そこでは、高野を操っていたあの謎の男が、周りに部下を引き連れて、会議を行っていた。

「今回の作戦で、綾崎ハヤテを逃がした…。」  
「そういうと高野は縮まった。」

「お前などは、もう、用済みだ。さつさと処刑される。」  
「そう、謎の男がいうと、高野の周りを男たちが囲み、高野を別の部屋に連れ去ろうとした。」

「少しでも、話を…」

高野はそうだったが、それは通用しなかった。

「さて、これからどうするかだ。」

「そう、男は言った。」

「もう、私たちには時間がありません。もう、綾崎ハヤテなしでも次のステップに進んで、同時並行させて行ったほうがいいのではないのでしょうか。」

部下はそう男に進言した。

「しかし、そんな簡単に行くのか。」

男の問いにこう部下は答えた。

「はい、どうやら、私の調べでは、綾崎ハヤテはすでに私たちの目的を知ったようです。多分、日本に被害が及ぶような事件があれば、彼の性格上、それを阻止しようとするでしょう。それをあえて逆手にとるしかないのではないのでしょうか。」

その部下の意見に男は納得した。

そして、命令を下した。

「では、これから第二ステップに移行する。全員、提案者である、富士見の指揮下で動くように。」

部下たちは、第二ステップに進むことを提案した富士見の指揮下に入ることとなった。

早速、富士見はある作戦を立てた。

それは、白鷗学園の前から、東京を制圧して行くことだった。

これならば、即座にハヤテが反応すると思われたのだ。

そして、早速、それは実行されることとなった。

## 第9話 白皇の戦い！！

白皇学院でいつもとは少し違うが、世間の常識からすれば、至極平常に授業を受けている三千院ナギと綾崎ハヤテの前に新たな脅威が待ちかまえていることなど、まったくなかった。

そして、ついに富士見の戦略が始まった。

近くの工場に高さ10m、総重量、100トンのロボットが立ち上がった。

富士見は、遠隔操作している操縦士にこう命令を下した。

「第二杉並区建設計画始め！」

それとともに操縦士は手元にあるモニター画面に表示されているモニター類の確認を行った。

「出力200パーセント、発進します！」

そして、ロボットは、杉並区の結構な部分を占めている白皇学園へと乗り込んでいった。

それはすぐに白皇学園も察知した。

白皇学園は、まず、侵入を防ぐための措置に出た。

しかし、それはすぐに破られてしまった。

そして、そのことは、生徒会長であるヒナギクの所に、すぐさま伝えられた。

「もう、全員退避させるしか方法はないわ」

そうヒナギクは判断した。

そして、放送で、全員に告知した。その放送にもかかわらず、職務上、そして、大事な人を守るためにも、あえて危険な方向へと向かわなければならぬ奴もいる。

その一人に、ハヤテが入っていた。



「あ、あれが…。」

ロボットの目の前にハヤテたち、執事軍団が姿を表した。さらに、あとから、生徒会長であるヒナギグもついてきた。

「何の目的でこんなことを。」

ハヤテはそういった。

「ははっ。お前が綾崎ハヤテか。」

そうロボットは言った。

そして、続いて、こう言った。

「俺たち、暗黒世界軍団は、これから、世界征服を始める。そのプロローグとして、白皇学園を占拠する。そして、綾崎ハヤテ、お前は、その超人的能力を我々に授けることにあるのだ。」  
「そう言い終わると、ロボットをさらに先に進めた。」

「これ以上、先には進めませんよ。」

冴木ヒムロが、先に攻撃をロボットに仕掛けた。

しかし、その攻撃は簡単にかわされてしまった。

こうなると、その場にいる執事たちが解決するのは困難に思えた。しかし、皆、諦めていたわけではなかった。

その中にハヤテも含まれていた。ハヤテが次に攻撃に出た。

「ふふっ、そんな攻撃で戦えるとも思っているのか。」富士見はそう言った。

「そんなのやってみなきゃわからない！」

そうハヤテは富士見の言葉に反論した。

そして、ハヤテはある技を使った。

それは、手からビームを出すというものだった。

その姿に、ヒナギグがこうつこんできた。

「これ、ドゴンボールの…。」

「いや、これは、新興宗教じゃないでしょうか。手で病気が治るとか…。」

春風がそう言った。

しかし、どちらかは少なくとも違っている。

そんなこんなの様子をしている間にハヤテはロボットに対して、放った。

しかし、それは、貧弱なものであった。

「ははっ。そんな攻撃が聞くわけ…。」

富士見はそう言った。

しかし、すぐにロボットに異変が起きた。

「艦長！右腕から、エンジンオイルが漏れてます。」

「なに！」

富士見はその瞬間、背筋が凍る思いがした。

「バルブを締めることは。」

「それが、バルブがないんです。」

艦長は、その場で指示した。

「全員、退避！！」

しかし、それを止められるものはいなかった。

そして、夢が一つ消え去った…。

ハヤテたちはそれに気づいて、遠くへと逃げた。

その途中、爆発の光景を見た。

これで、ひとつ、戦いに終止符を打てた。

しかし、世の中はそんなに甘いものではなかった。それは、また、いづれか、他の形で現れることになることなど、まだ、想像もできなかつた。

## 第10話 500mの戦い

「はははっ。くそー。これで、さらに借金が…。」  
この不景気、泣きをみるものもいるけど、この泣いている男は、白皇学園に攻め入り、見事玉砕してしまったあの謎の男である。

「大泉さん。配達物です。」  
泣いている男に配達物が来た。

「なんだろう。」

開けてみると、やはりそれは催促状だった。

それに大泉は泣きつづけるのだった。

その頃、三千院家。

「早いもので、あと少しで、ナギもハヤテ君も高校3年生ですね。」

「そうですねえ。」

ハヤテは、そう答えた。

「ところで、そろそろ大学に向けて、ハヤテ君も勉強しないとまずいんじゃないですか。」

マリアさんがそうハヤテに言った。

「いや、僕は、高校を卒業できただけでも…。」

ハヤテは、約1億5000万円をしておきながら、高校にも通わしてもらっているという思いがあるのである。

「いえ、一流の執事になるのであれば、大学も出ておかないと…。」

世の中も、大学を出ることが前提になっていきますから。」

そうマリアさんに言われて、ハヤテは、ありがたがりながら、うなづいた。そして、泣き始めた。

「ハヤテ君、それぐらいで、泣きつくのはやめて下さい。そのうち、部屋の中が涙で溢れちゃいそうになっちゃいますよ。」

マリアに忠告されたハヤテは、泣くのをやめた。

それを見ていたナギは、こういった。

「なんて、世界一、可愛いんだ。」  
女子にそんなことを言われていいのかと思うような発言をかけられたハヤテだった。

「それで、話がまだ…。」  
マリアさんがそう言った。

「はい。」  
ハヤテは聞く体制に入った。

「白皇学園の大学に入るのに某東京にある国立大学並に難しい問題が出されるのですが…。ハヤテ君ならきつとかつとされて、入れないですよね。」

「えー。」  
それにハヤテは驚いた。何せ、ギリギリ白皇学園に進学した身である。

それは、不可能だった。

「ハヤテ君には、流石に予備校に通わないと無理そうなので、一応、紹介状を書いておいたので、明日の放課後にも行ってきたみてください。」

そう言われたハヤテは、次の日の放課後、その紹介状に書かれている場所に行くために電車に乗った。

しかし、その後、想像を絶することが待ち受けていた。

まずは、黄色い電車に乗り込んだ。

しかし、ここからが試練。なんと、各駅停車に乗ったものの、ほんの500mくらい走っただけで駅に着いてしまうのである。

これでは、いっお茶が水に着くか分からない。

ということ、次の都立家政駅で降りて、走った。

これならば、電車より早い。

そして、高田馬鹿に着いた。

「はあ。まさか、あんなに遅かったとは…。」

本当に、しょっちゅう止まるのでは、電車を利用した気にならない。

「げつ。」

ハヤテはふと紹介状を見て驚いた。

なんと、5時半までしか受付が開いてないというのである。

その時点で、もう5時を過ぎていた。

すぐに電車に飛ば乗らなければ、5時半までにお茶が水に着くわけがなかった。

電車に急いで乗った。もう、ハヤテの息は切れかかっていた。

しかし、都心の電車はいつでも満員である。しかも、息を何時までも切らしていると逆に監視カメラに撮られているので、変質者として、裁判になりかねない。

急いで、息を元に戻した。

そして、電車を乗り換え、ようやくお茶が水に着いた。

「これが、あの…。」

ハヤテが予備校の校舎を眺めているとその前を小さな女の子が自転車で通り過ぎていった。

第10話 500mの戦い(後書き)

今回から少し、大泉から離れてみました。  
当分の間は、離れそうですけど…。

第11話 こんな田舎存在しないですよ…。経験則から言って…。

お茶が水に着いて、入学の手続きを終わらせたハヤテ。帰日も来たときと同じ高田馬鹿に着いた。

ここでまた電車を乗り換える。

ホームは帰りの通勤客で満員だった。

「まもなく、1番線に通勤田舎快速 本田舎行きが8両でまいります。」

黄色い電車がホームに滑り込んできた。

ハヤテの降りる駅にはこの電車は止まらないので、乗らないように横にいたが、運悪く後ろのおじさんに押されて電車に乗り込んでしまった。

「おっと、ちょ…。」

ハヤテが降りようとしたときには、ドアが閉まってしまった。

そして、電車は動き始めた。

『本日も奥東京鉄道をご利用くださいます、ありがとうございます。』  
「この電車は、通勤田舎快速本田舎行きです。停車駅は、武蔵田舎、東武蔵、所情時、新所情時、お茶市、終点、本田舎です…。」  
ハヤテはその放送にビックリした。

「ええっ、まさか、降りる駅よりも10個以上も先の駅に…。」

ハヤテはがっかりした。

しかし、電車は満員の状態でグダグダと走って行った。

「うわあ…。」

本来なら降りなきゃいけない駅をこの電車は通り過ぎた。

ハヤテはそれを眺めて、悲しくなった。

それから15分後。

ようやく、最初の停車駅、武蔵田舎に着いた。

満員の電車を降りたハヤテであったが、降りたのはハヤテひとりだけ。

しかも、明らかに、どこかで見たことのある駅だった。

ホーム上には、屋根がなく、駅員もいない。そして、駅前にすら家一軒もなく、田んぼと森しかなかった。

「で、逆の電車はつて、ええー。」

ハヤテは驚いた。

なぜなら、逆行きの上り電車がないのである。

上り電車の最終はなんと、午後4時。

「そんな駅が…。」

ハヤテはすっかり気を落とした。

「これからどうしよう。周りを見ても、幹線道路が見えないし…。」

だいたい、明らかにあるおばあさんの命令をうけたランプが迎えに来そうな雰囲気だし…。」

そんなことを考えていると、線路の前を何か巨大な動物が横を通り過ぎて行った。

「うわっ。」

その得体の知れない動物にハヤテは驚いた。

その後、数十分たつても、その場に立ち尽くしていた。

しかし、一向に電車が止まる気配はなく、ほとんどの電車が通り過ぎて行った。

不思議な駅だった。

「誰だ!！」

いきなり後ろから、ハヤテは声をかけられた。

「うわっ。」

ハヤテは後ろを振り返ると、明らかに時代錯誤な縄文時代の人のような格好をした少女が現れた。

「まさか、もののけ…。」

「おっと、そこまでだ。」

少女はそう言った。



「お前は何をしに来た。」

「いやあ、電車を間違えて乗ってしまつて…。」  
「ハヤテは少女にそう言った。」

「全く、たまに馬鹿なやつがこの駅で降りて、家に帰れなくなるんだ。まあ、明日の朝になれば帰れるけど、ここで一夜を明かすのはあまりにも危険だから、うちに来い。」

少女はそう言つて、ハヤテを家へ連れて行つたのだつた…。

しかし、ハヤテをさらなる苦しみの底に至らしめることが起きるだの、このときは想像もできなかった。

## 第12話 田舎に泊まっちゃった。

少女の家の前に着くと、そこには、日本の原風景と言えるような田舎の平屋の家があった。

「おお。」

思わず、ハヤテは声を上げてしまった。

「おばあー。おばあー。」

少女が声を掛けると、家からおばあさんらしき人が出てきた。

「なんだい、三奈ちゃん。」

おばあさんはそう言った。

「さつき、その駅前の田んぼで遊んでいたら、この少年が立っていたの。」

「そうかい。おまえさんは、迷い人ということだな。」

おばあさんにそうハヤテは言われ、うなづくしかなかった。

ハヤテは心の中で、こう思った。

『練馬では見かけない、いや、東京では見かけない、なんか暖かそうな人だな。』

「まあ、こんなところで立ち話してんのもなんだから、家の中にはいんなさい。」

そう言っつて、おばあさんは、二人を家の中に入れた。

「お邪魔します。」

ハヤテはそう言った。

家の中も、畳が敷いてある、昔の日本家屋だった。

「さあさあ、こたつに入っつて、暖まりなしゃい。今、マンマ持つてくるから。」

おばあさんはそう言っつて、台所のほうに向かった。

ハヤテは、なんだか、いい気分になっていた。

今まで、ハヤテは生まれて、親の愛情というものも、そして人の温

かい情というものも感じてこなかった。

いや、最近になって感じるようになってきたのかもしれない。

しかし、このような情は、苦しい世の中を生きてきたハヤテには心地良かった。

「さあ、今日は、猪鍋だ。」

おばあさんの声に、三奈も服を着替えて、囲炉裏のあるこの部屋にやってきた。

「あれっ。普通の服だ。」

ハヤテがふと言つと、三奈は笑つた。

「ああ、あの服装、ここらへんの伝統服なのよ。」

その言葉にハヤテはびっくりした。

「ああ、そういえば、あんな服装、今は見ないもんね。渋谷のギャルでもないし…。」

三奈は笑つてそう言った。

そして、夕食が始まつた。

その頃、三千院家では、ナギやマリアがハヤテの帰りが遅いのを心配していた。

「なぜ、ハヤテは帰つてこないのだ!」

ナギはそうマリアに言った。

「ええ、携帯に電話しても圏外だとしか…。」

「なに!」

ナギは驚いた。

「一体、どこに消えてしまったんだ、ハヤテは…。」

ナギは落ち込んだ。

「まさか、XYZでおなじみのスナイパーと怖い外国人との闘争に巻き込まれているんじゃない?」

「一体、いつの話をしてるんですか、ナギは…。」

マリアは呆れたように言った。

「それとも、私を見捨てて、二丁目で…。」

その言葉にさらに不安が増していった。

「ごちそうさまでした。とても美味しかったです。」

「そうかいそうかい。そりゃ、わししゃにとってもうれしいわ。」

ハヤテの言葉におばあさんはそう言った。

「ハヤテ君、もうちょっと、ハヤテ君のことを聞きたいよ。」

三奈はそうハヤテに言った。

「はい。ちょうど、出版社へ原稿を高速で渡すアルバイトをやっていたところまで話していましたね…。」

そして、ハヤテは、三奈に話を続けた。

その頃、近くの森では怪しい影がうごめいていた。

「ウオー。」

近くで羽を休めていた鳥たちは一目散に散っていった。

そして、その物体は小高くなっていた山を降りていった。

その動きを察知したのか、しないのか分からないが、鷺ノ宮家の伊澄<sup>すみ</sup>はなにかハヤテの身に危険が及ぶことを察知して、執事にこう言った。

「なにか、ハヤテさまの身に危機が襲っている…。すぐにそこに行く準備を…。」

そして、早急に支度を始めたのだった。

### 第13話 謎の黒い物体（腐っているわけじゃないですよー!）

三奈やおばあさんと楽しく会話して、お風呂に入らせてもらったハヤテ。

「じゃあ、ハヤテ君の布団はここね。」

三奈がそうハヤテに言った。

「本当にありがとうございます。」

ハヤテはただ、お礼をいうしかなかった。

そして、就寝した。

それから数時間後…。

近所の家…。

ゴンゴン…。

外から誰かが叩く音に目をさました。

「誰だか。こんな遅くに。」

電気をつけてその家の人は驚いた。

得体のしれない黒い物体がそこに立っているではないか。

その人は一目散に逃げ出した。そして、近くに住んでいた三奈の家に駆け込んできた…。

「サチさん。大変だべ。」

その声に三奈の家にいたものはみんな目を覚ました。

「あら、新井さん。どうしたんだい。」

サチはそう訊いた。

「ぶ、ぶ、不気味な黒い物体が…。」

そして、三奈、サチ、ハヤテの三人が外に出た。

街灯はないが、月が明るく照らしている田園風景がそこには広がっていた。

「あっ、下がっててください。」

ハヤテはそう言って、その黒い物体を倒そうとした。

しかし、その黒い物体は、ハヤテの体をすり抜けた。

「まさか、本当に…。」

そして、後ろから、ハヤテは不意打ちをされてしまった。

「ハヤテ様…。」

ハヤテが目覚めると、そこには、伊澄が立っていた。

「うお…。」

びっくりして立ち上がろうとしたが、体がうまく動かなかった。

「そのまま、安静にしてください。」

伊澄はそう言っ、ハヤテを寝かせた。

「もしかすると、ハヤテ様の体に何か、不吉なものを埋め込んでいたのかしれない…。」

そう伊澄は思った。

しかし、それ以外のことはわからなかった。

そして、そんなことが起きている間に、夜は明けてしまった。

「あつ。夜があけてしまいましたね…。お礼に、朝御飯くらいは作らせて…。」

そうハヤテは言った。

しかし、三奈は、

「いや、ハヤテ君があんな目に遭ったのに、そんなことをしてもらわなくても…。」

と言った。

そして、朝食を摂ったあと、伊澄の執事たちによつて、三千院家まで送られることとなったハヤテであったが、そこには一昨日のハヤテとは少しちがったハヤテがいるようであった。

第13話 謎の黒い物体（腐っているわけじゃないですよ！）（後書き）

さて、なんか、伏線の張りすぎじゃないかというほど、自分でもよくわからなく、そして、今後、どうしようか、すごく迷っています。今後、私事等で更新が遅くなるかもしれませんが、これからもよろしく願います。

## 第14話 呪い??

大田舎で謎の物体におそわれたハヤテであったが、なんとか伊澄に助け出されたわけであったが、そこから今回の話はスタートする…

「どうも、ありがとうございます。伊澄さん」

ハヤテは三千院家の前まで伊澄に挨拶した。

「い、いえ、とんでもありませんわ…。ではこれで…」

そう言つて伊澄は車で三千院家を後にしていった。

「一体、伊澄さんと何があったのでしょうかね？」

マリアはなぎにそう言った。

「ま、まさか…。伊澄とハヤテが…」

いつものようになぎは妄想とそれに伴う不安が頭から離れなかった。そして、また、いつもの生活がスタートするのだが、ハヤテは昨日の騒動でとても体力を使い果たしていた。

いや、実際には、体力を何かに吸われていたようだが…

しかし、掃除などの仕事を昨日の自分の失態によって睡眠不足だと言つて休みたくはなかった。

そして、ふらつきながらもハヤテはマリアさんに仕事分担を尋ねた。

「いや、そんなに疲れているのですから、ハヤテくんは休んでいていいですよ。」

そうマリアさんはハヤテに返答した。

「もともとは、僕が昨日、電車待っているときに後ろから押されて優等列車に乗ったから…」

そのハヤテの言葉に、再び、不幸しか迷い込まないことを認識させられるばかりであった。

「ともかく、今日はこの位でいいので、自分の部屋で休んでいてください。」

そうマリアに言われて、ハヤテは自分の部屋に戻った。



そして、ベッドに横たわるとすぐさま眠りについたのであった。

それからしばらくたった頃だった。

マリアが廊下を掃いていると、むこうからからハヤテが歩いてきた。

「ハヤテくん、どうかしましたか？」

そうマリアは声をかけたがハヤテはそれに無反応だった。

よく見てみると、いつものハヤテとは違い、目は死んだ魚のような目をしていた。

まるで何かにあやつられているようだった。

マリアは急いでナギやSPに伝えた。

「ハヤテを追っているのか。」

ナギは不安そうにマリアに訊いた。

「ええ。」

そうマリアは答えた。

その頃、ハヤテは、敷地外に出て、道を進んでいた。

そして、とあるところに立ち止まった。

そこは神社だった。

SPが後ろからみていると、そうとも知らず、ハヤテは神社の中に入っていた。

そして、何か不思議な動作をしたのだ。

SPには訳が分からないことをやって、そして、ハヤテはまた屋敷に戻った。

そして、ハヤテは何事もなかったように寝てしまった…。

その後、ハヤテは目をさました。

「おはようございます。マリアさん。」

「ええっ。ああ、どうですか、具合の方は…。」

そうマリアはもじもじしながら訊いた。

「はい。」

「ああ、そうですか。」  
「マリアは、ハヤテに神社に行ったことを聞けなかった。しかし、一体、何をしに行ったのだろうか。それは、また次回。」

## 第15話 ハヤテ、倒れる！？

そして、翌日。

ふらつと、伊澄が迷子になって、紛れ込んできた。

「あら……。ここは、、、あつ。ナギの家だわ。」

そんな能天気になっていたとき。

「あら、伊澄さんではないですか。今日は何かのご用事で。」  
とマリアが声をかけてきた。

「いや、その、、、迷子になってしまつて……。」

「まあ、そうですね。では、せつかくなので、ナギと遊んでいってはどうですか？その間に、連絡しておきますので。」

「では。」

そう言つて、伊澄は、ナギの家へと入つて行つた。

「ナギ、伊澄さんがおいでになりましたよ。」

ゲームに夢中になっていたナギをマリアが呼んだ……。

「おう。」

そして、ナギは伊澄と挨拶をかわした。

「そういえば、最近、ハヤテに何かあつたのかしらないが、家から勝手に逃亡して、大変だつたんだが……。」

そうナギが口にする、ふと後ろから、

「まさか、借金執事、ナギに飽きたちゃうか。」

という関西弁が聞こえてきた。

「おお、咲夜さくやではないか。」

ナギがそういうと、咲夜は話を続けた。

「借金執事もいよいよ化けの皮がはがれてもうたか。そういえば、借金執事はどこに。」

咲夜が聞くと、ナギはこう答えた。

「今、買い物してもらっている。」

その話を訊いた伊澄はなにか嫌なものを感じた。

「どうかしたのか、伊澄さん？」

咲夜が伊澄に訊いたが、伊澄は、

「いいえ別に。」

と答えた。しかし、心の中では、こう思っていた。

『ハヤテさまの中になにか悪いものが入って、そして、どんどんと、ハヤテさまの身体を乗っ取っていきこうとしている…。』

その頃、ハヤテは屋敷に帰ろうとして、歩いていた。

「うっ。」

突然、道端で頭が痛み、道に倒れそうになった。

「ああ、大丈夫だ。しかし、この身体、昔と違って、かわいいというかなんというか、違う気が…。」

そんなことをハヤテは思った。

「おっ。これは、…。」

手に持った買い物袋をみてこう思った。

「ああ、買い物かあ…。それでは、この前の屋敷にとりあえず戻れば…。」

そう言っつて、ハヤテは、屋敷の方へと向かった。

そんなことが起きているのも知らず、ナギたちは普通に過ごしていた。

「たいだま戻りました。」

ハヤテが屋敷へと戻ってきた。

しかし、そのとき。

「うっっ。」

ハヤテはその場に倒れ込んでしまった。

「ハヤテ！」

「ハヤテ君！」

悲鳴を聞いたマリアやナギたちが慌ててハヤテの前に現れた。そして、ハヤテは病院へと搬送されたのであった。

「別に、どこか、身体に異常があるものがないので、もしかすると貧血などによるものなのかもしれません。」

診察してくれた医師はそう、マリアに電話で診断の結果を伝えた。

「そうですか。」

その診断結果に少し安心したが、ここ数日のハヤテの行動をみると、完全に心配が取れることはなかった。

ハヤテが倒れたあと、家に戻った伊澄は、マリアにこう言った。

「もしかすると、ハヤテ様は呪われてしまっているのかもしれないせん。」

しかし、それは、マリアに伝わったのか、真偽の程ははっきりしない。

## 第15話 ハヤテ、倒れる！？（後書き）

2月は、一番、他のことで忙しくなりそうなので、更新が遅くなります。

## 第16話 その状態は永遠に続くとは限らない…。

ハヤテが病院に入院してしまった三千院家では、執事長であるクラウスが頭を抱えていた。

「はあ、綾崎ハヤテに執事が変わってから、なんとなく、三千院家がうまく回らなくなったような気がする。そろそろ、あの少年を本当に辞めさせるときが来たのかもしれない。」

そして、ナギは、対照的にハヤテのことを心配していた。

しかし、その心は、昔のハヤテの心配とは少し違っていた。昔の心が100%だとすると今は、90%ぐらいであった。

ナギはそのことについて、ハヤテのことを信じているからだと自分に言い聞かせた。

しかし、それは違うような気もしていた。

そんな中でも、三千院家では今日も、ほぼ普通の日常が繰り返されていた。午後、クラウスは、ようやく方針を決めた。

そして、マリアを呼び出し、こう告げた。

「お嬢様の気を損ねないと判断した場合、即刻、綾崎ハヤテをクビにする。」

マリアは驚いて、聞き返した。

「クラウスさんは昔もそう言って、ハヤテくんを辞めさせましたよね？」

「ああ、しかし、マリア。雇ってから一年以上経つが、お嬢様に忠実に従っているか、最近は怪しくなっている。やはり、あの少年は不幸を呼ぶ少年だったのかもしれない…」

「ですが、クラウスさん…」

マリアは言い返そうとしたが、クラウスはこう言った。

「今回ばかりはしょうがない。しかし、まだお嬢様にこの話をした

ら、絶対、拒絶するだろう。様子を見ながら長い間を掛けてじっくりやっていこうと思う。私だって本当なら辞めさせたくはないんだ……」

クラウスの浮かない顔にマリアも黙ってしまった。そんなことになっっていることを知らず、ハヤテは病院のベッドで目を覚ました。

「あれ、ここは。」

気づいてみるとそこは病院だった。

「あれ、お嬢様は？」

見回すとそこには誰も居なかった。

「はああ、」

ハヤテは深いため息をついた。

最近の自分は相変わらず、人に迷惑ばかりかけているような気がした。いや、実際、最近が悪運がさらに酷くなったのではないかと思うくらい迷惑を掛けている。

そのような自分に執事をこのままやっていていいのだろうかと言う不安が再び襲いかかってきた。

いや、今まで、このことについて触れる時間がなかったのかもしれない。

今までは、もっと他のことを考えていて、こちらまで頭がまわってなかった。

そんな気がしていた

そして、ハヤテは瞑想に耽った。

何故か、三千院家を疑心暗鬼が包み込んでいった。

それは、今までの流れのツケが回ってきたのかもしれない。



## 第17話 退院、そして

「綾崎さん。」

ハヤテが瞑想にしばらくふけていたとき、ようやく看護師がハヤテが目をさましたことに気がついた。

その後、血圧やCTによるスキャンなどの検査をした。

「別に、異常はなさそうですね。」

主治医の先生が結果をみて、そう言った。

「では、屋敷の方を呼んで、退院にさせていただいてよろしいでしょうか。最近、この病院も急患が多くて、ベット数が少ないんですよ。」

それにハヤテはうなづいた。

その後、病院から連絡を受けたマリアが病院にやってきた。

「もう具合は大丈夫なのですか。」

それにハヤテは、

「はい、おかげさまで」

と言った。

「そうですね……」

マリアは少しトーンを落として返事をした。

理由は、先日のクラスからハヤテに対して、実質的に解雇をするというものであった。

マリアとしても、あのときはなくなり、クラスに対して反論は出来なかったが、やはり、できれば、引き続き、ハヤテに働いて貰いたかった。

いや、既に、ハヤテは三千院家の一人である。抜けた途端、何かが大きく穴があいたような感情を持たせる気がした。

ところ変わって、東京の某所。

「あー。くそー。世界征服しようという人間がなんで夜中に道路のアスファルト打たなきゃいけないんだよ…」

そう、世の中の不満をぶちまけているやつがいた。名は、大泉。かつて、世界征服の足がかりに白皇学園をロボットで攻め行ったものの、綾崎ハヤテにやられ、借金だけが残ってしまったという悲しい有り様になってしまった一人である。

そして、今日も夜明けまで、借金返済のために工事現場で働いて、会社の寮に戻ってきた。

「はあー、いつまでこんなことしていればいいんだろう。」  
そう思い続けていたが、もはや体には力は残ってなかった。  
そして、布団に伏したまま寝てしまった。

それから数時間後。

大泉が目を覚ました。

「2時かあ…。」

ふと、テレビをつけるとそこでは、ワイドショーをやっていた。

そこで、最近起きた、掲示板を経由して内部機密がバレたというものをやっていた…

「掲示板かあ…。」

ぼんやりしていた頭に一つの案が閃いた。

「そうだ、掲示板に綾崎の中傷をしてやろう！」

そんな短絡的な発想で、大泉は掲示板に向かった。

携帯で、日本最大級の掲示板に向かった大泉。

そして、新着スレッドの下のスレッド作成のページを開いた。

そして、大泉は、ついにスレッドを立てた。

名前は、名づけて

【綾崎】執事なんて辞める

というものだったらしい。(現在は、削除されたらしいので、わか  
らないのです。)  
さて、そのスレは、一体どのような内容だったのか、検索サイトの  
キャッシュを元に次回、復活させます。(って、おい!!!)

## 第18話 掲示板には悪口を書かないでねっ！

綾崎ハヤテを口撃するためにスレを立てた大泉。

しかし、タマのようにうまくは行かなかった。

それでは、スレの内容を

1：名無しでゴー：2000X/000/20 23：41

綾崎ハヤテは、日本にとって、最悪なものだ。今すぐ、死に値すべきだ

2：名無しでゴー：2000X/000/20 23：45

もちつけ

3：名無しでゴー：2000X/000/21 00：01

そういえば、綾崎ハヤテって、女装が趣味と聞いたが、ホント？

4：名無しでゴー：2000X/000/21 00：03

<<3

ああ、そうらしい。

5：名無しでゴー：2000X/000/21 00：07

<<4

まじで、画像k w s k

と、なんか、変な方向へと進んでいる掲示板。

しばらくして、この書き込みを見て、大泉は、次のように書いた。

6：名無しでゴー：2000X/000/21 00：15

おい、みんなで、叩き潰そうぜ。

しかし、その後も、スレは、綾崎ハーマイオニーのネタへと突入していった。

そして、大泉を、次のスレが追い打ちをかけた。

18：名無しでゴー：2000X/00/21 00：39  
<<6

女装が似合う、男の娘を殺すなんて、勿体無い。

19：名無しでゴー：2000X/00/21 00：44  
<<6

俺なんか、オランダに連れていこうとしたんだぞ。未だに返事が返ってこねえー。

20：名無しでゴー：2000X/00/21 00：50  
<<19

おお、俺は、接吻しそうになっただけど、思いつきり、上に飛ばされたぜ…。

全く、黒猫といい、可愛げがないんだよ。

その後、このスレは、綾崎ハーマイオニーの話題で埋め尽くされたそうなの…。

しかし、一体、19と20のスレをしたのは誰なのだろうか。

それは、一般人が知るのには難しい。

場面は所変わって、三千院家。

一匹の白いとらがなになら、夜遅いというのにパソコンの画面を眺めていた。

さて、何を見ていたのかは、誰にも分からなかった。

しかし、翌日。

「うおー、ハヤテ!!」

「どうしました、お嬢様!!」

部屋にハヤテが入ると、ナギはSOY製のパソコンを眺めていた。ハヤテが駆けつけてきたことにナギがすぐ気づき、こう言った。

「ハヤテのスレが建っているぞ。」

それにハヤテは驚いて、ナギのパソコンを覗いた。確かに某巨大掲示板スレが建っていた。

しかも、タイトルを見て、驚愕した。

「まさか…。」

ハヤテの頭の中には、ひとりの男しか、頭に浮かばなかった。

しかし、スレを見て、さらに驚く…。

流石に、書き込みが、ここでは書けないほど危ない方向に進んでいた…。

「げえ…。俺、この先、商店街とかに買い物に行ってしまった方がいいのだろうか…。」

身の危険をハヤテは、その掲示板で肌で感じた。

当初の大泉の思惑とは違う所で、ハヤテは攻撃を受けた。

終わり。

最後に。

掲示板では、決して、人の悪口は書かないようね。



## 第19話 浮上を狙った新たなる作戦

掲示板作戦で見事に玉砕した大泉。

翌日、朝の目覚めが悪かった。

「どうして、俺は、人ひとりも倒せないんだ!!」  
柱に頭をつけて考えた。

「ああ、もう、俺の人生なんかどうでもいい。しかし、最後に綾崎ハヤテにだけは、綾崎ハヤテにだけは、復讐をしてやる。」

そう言つて、しばらくそのままの姿勢でいた。

「そうだ。いいことを思いついた。」

大泉はそういうと、すぐさま、計画を実行するためにあるところに向かった…。

それは、学館組のところであつた。

「やあ、お久しぶり。大泉さん。」

兄貴がそう挨拶する。

「あの、今日は、ちよつと話があつて…。」

そう大泉が言つと、兄貴はこう返した。

「まさか、また金ですかいな…。」

「はい。」

大泉は、頼りない声で言つた。

「そういえば、お前さん、三千院家の執事に攻撃をしてるんだろ。」

「はい。」

「それなら、話は早い。三千院家の娘をサラって、身代金を要求すればいいんだよ。」

それに大泉は納得した。

「一応、子分、派遣しておくから、うまくやれよ。」  
そう大泉に言つた。



その後、大泉が宿舎に帰ると、作戦を練った。そして、会社への辞表も書いた。

夜があけた。

朝、事務所に行くと、すぐさま上司に辞表を提出した。

上司は驚いて、

「えっ、君辞めるの？」

と言った。

「はい、実は、親が田舎で病気を患ってしまっ…。」

大泉は心にもないような顔で上司にいった。

「そうか、君もかんばってね。応援してるよ。」

そう上司は言った。

荷物をあらかじめまとめておいた大泉はそれを抱えて、建設会社の寮を後にした。

大泉は、待ち合わせの場所へついた。

そこにはいかにも屈強そうな男が立っていた。

「おう、あんたが大泉とかいう、どっかの東堂をもじったような名前の人かい。」

そういうオタクチックな、会話をかけられた。

「はい。そうですか。」

「そうかい、いまどき、誘拐なんぞやって楽しんでるのって、一部のオタクが快感を覚えるやつぐらいだろ…。面倒くさいなあ…。」  
「なんともやる気のない発言に、ちよつと大泉は驚いてしまった。

『本当に、この人たちで、大丈夫なのだろうか…。』  
そういう不安が大泉の脳裏を横切った。

ともかく、こうして、大泉の新たな作戦が始まったのだった。

第19話 浮上を狙った新たなる作戦（後書き）

大変、遅くなってしまいました。

最近、何故か、執筆する気が起きなくて…。

今後も、もしかすると遅いかもしれませんが、よろしくお願いします。

## 第20話 徐々に進む作戦

その頃、三千院家では、久しぶりにナギが学校に行かされるハメになった。

ナギは、またもや、学校に最近行ってなかったのだ。

「お嬢様は、しばらく、学校に、僕と一緒に行ってもらいますからね。」

そうハヤテは少しキツイ言い方でナギに言った。

少々、ナギは面倒臭いような態度をとってたが、それと同時に、ハヤテと学校に行けるといふ嬉しさも少なからずあった。学校に着くと、クラスメートの生徒会三人娘に囲まれた。

「へえ、これは珍しい。」

「ナギちゃん、学校いつぶりなんだろう…」

そう茶化す三人に、ナギは頭に血が上って、

「そんなに言わんでもいいだろ」と言った。

まあ、そんなこんなで、授業はスタートした。

一方、大泉たちは、そんな三千院ナギと綾崎ハヤテの行動を追跡していた。

とりあえず、学校に行つて、裏のほうから、学校内に侵入した。

なんと、たまたまそこは警備が疎かになっていた。

普段ならば、侵入者が入ったら、すぐさまSPが駆けつけるはずなのに、そこから入っても警報機すら鳴らなかったのである。

敷地の広すぎる白皇学園ならではの問題である。

さて、そうして奇跡的に侵入に成功した大泉たちだったが、大泉たちを悩ませる問題がでた。

それは、学校の中なのに、絶えず人が外の庭の中をうろろろしていることであつた。

別に、学級崩壊を起こして、生徒がウロウロしている訳ではない。この学園内では、単位さえ取れば、なんとかなつてしまふのである。

そんな制度があることも知らず、大泉たちは困り果てた。

大泉たちが横切ろうとすると、明らかに女子のコスプレを楽しんでいる生徒や、ドゴンボールの衣装を着て、孫空の必殺技をしようと思ふ生徒、さらには、柔道着を着て、「1、2、3、4、アルツク、2、2、3、4、アソツク」と連呼している生徒たちまでが、まるで、嫌がらせのように通つていった

そんなこんなしているうちに、あつという間に授業が終了する、午後3時頃を迎えてしまつた…

「お嬢様、久しぶりの学校はどうでしたか。」

帰りの自転車を漕いでいたハヤテはナギにそう訊いた。

「ああ、ものすごく退屈だったぞ、ハヤテ。なんであんな知ってるものをあんなに細かく教わらなければならぬのだ。あれだつたら、よつほど、宇宙怪獣対戦アニメで物理学を学んだほうがマシだ。」

「いやあ、それは、単なる無理矢理な…。」

そんな会話をしながら、学校を後にして行く二人であつた…。

「くそつ。一旦撤退だ。」

時計を見て。大泉はそう言った。

そして、白皇学園から撤退した大泉たちは、残された時間は少なかった。

「作戦変更しましょう。ともかく、三千院家に潜入し、住宅に送電する送電線を遮断、対応に追われているうちに連れ去るという方法

をとりましょう。」

そう部下として手配された男が進言してきた。

「そんなの、できるのか。」

大泉は尋ねた。

「なんとか、」

そう大泉の問に答えた。

そして、一行は、急いで三千院家に向かった。

## 第20話 徐々に進む作戦（後書き）

ということ、2月の最後に20話まで進めました。

さて、この先、どうなるんだ。このままだと、普通の誘拐話と変わらない…。

いや、変わりますよ…。

その前に、この話をそろそろ終わらせたい…。

ということ、期待しててください。よろしくお願いします。

## 第21話 断線の夜に・・・

そして、大泉たちは、三千院家の前に来た。

ここにも、屋敷を警備する警備ロボットやSPが大量にいた。どうやって、この警備をかいくぐるのかが課題だが、屋敷の中は広い。

警備の穴を探すのは、白皇学園と同様に簡単に見つかると思った。

そうして、大泉たちは屋敷の周りを一周してみた。

「あっ、ありました。三千院家につながる送電線が！」

そう部下が指さしたところに、送電線があった。

しかも、ちょうどそこは木が茂っていて、明らかに警備がされてなかった。

「よし、ここから中に入って、警備ロボットなどに見つからないようにし、そして、邸宅を襲撃をするぞ。」

そう大泉は言った。

「まずは、俺たちが屋敷内に侵入する。その後、30分経っても俺たちが戻ってこないならば、お前は、送電線を切れ。」

「はい。分かりました。」

「そして、言っておく、送電線を切ったら、そのまま車を駐車した場所へ戻れ。俺たちが指示したら、車をここへ持って来い。もしも、俺たちが作戦に失敗しても、お前は逃げる。わかったな。」

大泉は、そういうと残りの部下を引き連れていった。

そして、作戦はスタートした。これに失敗すれば、多分、大泉は、命を売らなければならぬことになると思っていた。

そういう土壇場まで大泉は追いやられていた。

失敗は許されなかった。

そして、大泉たちは、森の中を進んでいった。

そうすると目の前に広がってきたのは、ナギナギランドであった。

「なんでしようかね。この建物。」

「どうせ、豊園とかだろ。どこかに池袋に行く黄色、もしくは、青色、もしくは…」

「そんなこと、どうでもいいので、さっさと前進みましょう。屋敷を早く探さないで。」そう、助言された大泉たちは、さらに前へと進んだ。

なんとか、ここまで、警備ロボットにも見つからなかった。

大泉は思った。

今回の作戦は、神風が吹いているのではないかと。

そして、ついに邸宅が見えてきた。

そのときだった。

「大泉さん。地面の草むらに隠れて下さい。」

そう部下に言われた大泉は、とっさに、近くの草むらに隠れた。

ちょうど、間一髪のところまで警備ロボットに見つかりそうになったのだ。

「ありがとうございます」

大泉はそう部下に礼を言った。「いえいえ、それより、三千院家が停電になるのを待ちましょう。」

そう部下は大泉に言った。

それに、大泉も同意した。

大泉たちが侵入してから、30分が建とうとしていた。

「じゃあ、そろそろですか。」



送電線の横で待機していた大泉の部下が送電線を切断した。

その瞬間、三千院家は夜の闇に溶け込んだ。

その時、三千院家の中では、停電に大騒ぎした。

「マリア！ハヤテ！」

ゲーム部屋でゲームをしていたナギは怖がって、ハヤテやマリアを呼んだ。

すぐにマリアとハヤテが駆けつけた。

「ナギの面倒は私が見ますので、ハヤテくんは急いで、非常電源のほうを見てきてください。」

そうマリアはハヤテに指示した。

「分かりました。」

ハヤテはそういうと懐中電灯を持って、屋敷の玄関から非常電源のある場所に向かった。

大泉たちも停電と共に行動を開始した。

屋敷の玄関から入ろうとしたのである。

幸い、SPたちは、屋敷の近くには、配置されていなかった。

それは、ナギが嫌がったためであった。

今回は、明らかに大泉たちに運があった。

しかし、それでも乗り越えられないこともあった。

それは、ハヤテとの遭遇であった。

## 第21話 断線の夜に・・・(後書き)

こんにちは。

今日、3月3日といえば、両津勘吉の誕生日。(っておい！)  
そうではなく、ヒナギクの誕生日だそうですね。(なんか、遠目だ  
な。。。)

畑先生やヒナギクラブの方々も、3月3日ということで、色々や  
ってるみたいですよ。(詳しくは、<http://twitter.com/hatakennjiro>で。)

しかし、せつかくなら、謎沢も何かやらねば。

ということ、今日に限って、2話を午前と午後に分けて公開した  
と思います。

物語もいよいよ進展が。

しかし、作者の頭の中ではさらに恐ろしいことが潜んでいます。

まあ、それをやるためにも、そして、ヒナギク誕生日記念というこ  
とも含めて、2話投稿したいと思います。

それでは、また夕方以降に。(次話の投稿予定は、17時以降を予  
定しています。)

## 第22話 明と暗の入れ替え

ハヤテが玄関から出ると、目の前に大泉とその部下がいた。

「あつ、この停電を起こしたのはお前たちだったのか!？」  
そうハヤテが叫んだ。

しかし、部下は、

「問答無用、お前を倒す。」  
と言って、ハヤテに襲いかかった。

ハヤテはそれを交わした。

しかし、今度は大泉も襲いかかった。

ハヤテは、それをさらに交わそうとした。

しかし、ハヤテは、大泉を避けることは出来たものの、地面に頭を強打した。

その瞬間だった。

ハヤテの中で本来の自分と、それまで、底のほうでずっと機会を伺っていた、もう一つの何かがスリかわった。

ハヤテは必死に、自分の体を取り戻そうとした。

しかし、自分の体は取り返せなかった。

大泉たちは一瞬、気を失ったハヤテを見て喜んだ。

大泉にとっては、自分が世界制服を企んだときから邪魔されていた、言わば、宿敵みたいな関係だ。

ようやく、倒すことができたと思ったのもつかの間、ハヤテは目を覚ました。

大泉たちは少し焦った。

しかし、自分たちのことを見ても、何にも攻撃して来なかった。

いや、ハヤテの口から恐るべき言葉が飛び出した。

「お前たちは、大泉というのだな。お前たちの作戦に協力してやる。」

「そのハヤテの発言は、ハヤテの声であったが、ハヤテが発したものは、到底聞こえなかった。そう、それは、あの前乗り移った悪霊の仕業だったのだ。」

そういうことは全然知らない大泉たちは、急に態度を変えたハヤテに対して、疑問を持ちながらもそれを歓迎した。

大泉は思った。

「ようやく、神は我に幸運を与えたと。」

大泉たちは屋敷の中に侵入した。

そして、静かに、ナギとマリアがいる部屋に向かった。

「ああ、ハヤテ君、どうしたんですか。人を連れて戻ってきて。」

ハヤテがドアを開けたときに、マリアがドアのほうを見て、そう言った。

「お嬢様を誘拐しに来ました。」

そうハヤテはマリアに言った。

「えっ、ハヤテ君どうしたのですか、」

マリアは不思議がって、ハヤテに問い直そうとした最中、ハヤテや大泉たちは、それを無視して、マリアとナギに襲いかかった。

「何するのですか、ハヤテ君！」

マリアはそう言ったものの多勢に無勢で襲われてしまった。

その悲鳴を聞いて駆けつけてきたのは執事長のクラウドだ。

しかし、そのクラウドも多勢に無勢で、やられてしまった。

マリアとクラウドはガムテープで口を塞がれ、手足にはロープで頑丈に縛られてしまった。

そして、ナギはいとも簡単に連れ去られてしまった。

しかも、屋敷のSPは、停電によって、屋敷の中のことなどまったく頭になかったのだ。

偶然が重なったと思えない状況はさらに続くのであった。

## 第22話 明と暗の入れ替え（後書き）

それでは、本日2話目を投稿します。

しかし、ヒナ祭り祭りの日にこんな話で終わらせていいのかわからない自問が…。

そんなことはどうでもいいとして。

次回は…。来週のいつか投稿します。

「小説家になるう」に登録して、お気に入り機能を使うと便利ですよ。

次投稿したときにユーザーページのお気に入り欄の上のところにくるようになってます。

ぜひ、登録してみてください。登録は無料です。

### 第23話 誘拐と破壊

そして、順調に作戦が進んでしまった大泉は、先程、侵入したところに再び戻ってきた。

そこには、確かに、車が来ていた。

中には、車の運転を指示した部下がいた。

「おお、作戦がうまくいったのか・・・。」

部下は、泣きそうなくらいの声で大泉に言った。

「ああ、執事が裏切ったんだぜ。ほら。」

横にはハヤテもいた。

そのとき、ナギがこう言った。

「ハヤテが、ハヤテが裏切る訳ないじゃないか。おまえたちみたいな奴のために。」

「ほほう。じゃ、なぜお前のことを守るために俺たちと戦わないんだ？」

そう大泉はナギに訊いた。

横では、ハヤテは黙っている。

「さあ、人質は車に乗った、乗った。しかし、この人質はうるさいな。少しは黙ってる。」

そう大泉は、ナギを目隠しして、車に押込めた。ハヤテにも念のために目隠しをさせて、車に乗せた。

そして、とある工場街へと車を走らせた。

「おい。外に出ろ。」

車が到着して、ナギとハヤテは外に出た。

そして、ナギはそのまま、倉庫の中に閉じ込められた。

残りの部下は、見張りとして、外に立たせた。

大泉は残りのハヤテの扱いについて困った。

あくまでも人質の執事である。

もしかすると、裏切るかもしれない。

しかし、こちらには人員が十分いるとは思えなかった。

『でも、俺が倒した後、こちらのほうに随分と協力してもらった。あいつとしては、今後仕事に戻れないようなことまでしてもらった。きつと、今度も任せて大丈夫だろう。』

そう大泉は思い、ハヤテにも警備につかせた。

その頃、ようやく、警備のSPにマリアと執事長のクラウドは助けられた。

そして、急いでハヤテとナギを追いかけるように指示した。

「今度こそはハヤテ君には執事をやめてもらいますから。」

そうクラウドはマリアに言った。

「でも。」

マリアが反論しようとした。

「マリアまで、ハヤテ君を擁護する気ですか。」

クラウドは強い口調でいった。

「いえ。でも、ナギは、ハヤテ君のことが好きでこの屋敷の執事として雇ったんですよ。ハヤテ君をやめさせたら、ナギはますます引籠もりになってしまいますよ。」

「マリアはそんなことを言うようになったのか。だからといって、このまま得体の知れない執事を三千院家に置いておいていいとでもいいますか。」

「それは。でも、ハヤテ君にはきつとなにかあったんですよ。例えば。。。。。」

マリアは言葉に詰まってしまった。

「マリアは一体、どうしたんですか。こんなことまでされてハヤテ君を置いておくなんて言うなんて……」

クラウドは少し呆れたような口調で言った。

「それとも、ハヤテ君を好きになったんじゃないでしょうね。」  
クラウドはそうマリアに問いかけた。

「いや、それは…。」

マリアは顔を赤くした。

「…。いえ、そんなことはないです。ただ、私も心の中から何か  
抜けたようになりそうで…。」

マリアの答えに、クラウスは思った。

『確かに、多分、ハヤテ君が抜けたら、何かが家の中央から消えた  
ようになるかもしれぬ…。』

そうして、議論は平行線を辿った。



### 第23話 誘拐と破壊（後書き）

さて、お待たせいたしました。ついに、ついに、ハヤテが……。  
ということ、乗り移られた何者かによって、誘拐の手助けをして  
しまうこととなったハヤテ。その後の影響も大きいはず。兎にも角  
にも、だんだん次回が待ちどろしい展開になってきました。（作者  
も、ちゃっかり、2話分一気に書いて、貯めてたり……。）  
今後もこの作品をよろしく願います。

## 第24話 綾崎倉庫事件

夜が明けて、三千院家のSPは、ナギとハヤテがいると思われるところについた。

SPたちはお嬢様を慎重に助けだすために、入念に様子を探った。そして、ナギは、目隠しを取られたものの、昨日のことがショックでただ倉庫の天井を眺めるだけしかできなかった。

『どうして、ハヤテがあんなことを…。』  
いくらハヤテのことが好きだと言っても、誘拐をするという行為にはショックを覚えた。

昔も、何度か誘拐されたことがあった。

そして、ナギは徐々にひきこもりになっていたのである。それを変化させたのがハヤテだった。

ハヤテのおかげで、辛い出来事もたくさんあったが、楽しかった。しかし、今回のことはそれを打ち崩すものだった。

『一体、私のハヤテは何処へ…。』

そんなナギの心も知らずにハヤテは見張りをしていた。

「うわ。綾崎ハヤテが見張りやってるぜ…。」

「こりゃ、やられるかもな。」

「しかし、突入しなければ、マリアさんに嫌われてしまう…。」  
SPたちはハヤテに戦々恐々としたが、それ以上にマリアに嫌われることが怖かったようだ。

そして、SPたちは、周囲の状況から、人数がこちらのほうが圧倒的に多く、突入可能であると判断して、それをマリアに報告した。

「そうですか。」

マリアは連絡を受け取ったとき、少し暗い口調で言った。

そして、突入を10時に設定した。

時間は刻々と近づく。

S P部隊を集結させて、倉庫を取り囲むように潜ませた。

そして、時計は、10時になった。

「突入せよ。」

その無線の掛け声と共に、装甲車や鉄球をつる下げたクレーン車が  
一斉に倉庫方向に飛び出してきた。

「親分、一斉にせめてきました。」

大泉の部下が大泉に伝えた。

「何。でも、こちらには、綾崎ハヤテという強力な助っ人がいる。

そんなに簡単には奪い取れないはずだ。しかし、相手から攻めて来  
るとは、こちらとしては、交渉がやりやすくなる。」

大泉はそう微笑を浮かべながら話した。

実際、最初はこちら側のほうが優勢だった。

なんと、ハヤテだけで、鉄球のついたクレーン車を倒してしまった。

「クレーン車やられました！！」

その無線に三千院家側は身震いをおこさせた。

「なんだと……。」

ただその言葉しか出てこなかった。軽井沢で起きたとある事件のと  
きには、家を壊して、無理矢理、中の人質を助けだすために使われ  
たものであったが、今回はそれすらできずに、粗大ゴミと化してし  
まった。

しかし、その後続いた特攻隊が無理矢理ハヤテを押しした。

その弾みでハヤテが倒れた。

そして、取り押さえることに成功した。しかし、ハヤテは地面に頭  
を打ち付けた、外的なショックからか気絶してしまった。

しかし、これで砦を落としたのと同義だった。

「綾崎ハヤテを確保。」

ハヤテの動きをなんとか防げたSPは勢いづいて、倉庫正面も突破し、中にいるナギを無事に助けだすことに成功した。大泉や部下も取り押さえられて、ひとまずは、三千院家に撤収することとなった。

そして、この事件を無事に解決することに成功したのだった。しかし、まだこれだけでは片付けられない問題もあった。

## 第24話 綾崎倉庫事件（後書き）

タイトルをどうするかで、考えてしまつて、変なタイトルになつてしまいました。

鉄球のクレーン車と、事件というタイトルから、あさま山荘事件のパロディ（そんなのありかよ。）も含まれていることを察していただけると、ありがたいです。

別に、倉庫だからまさか、お嬢様とハヤテの間で鞭の關係に陥るということは、絶対ありませんから。（何、変なことを考えているんだか。）

それでは、また次回をお楽しみに。

## 第25話 責任感と・・・

ハヤテは、誘拐事件の後、暫く気絶したままだった。

とりあえず、一旦、三千院家に戻り、ハヤテを一室に寝かせた。

そして、その横で、マリアは看病をした。

マリアには、こんな綺麗な寝顔をしたハヤテが、事件を起こすなんて、今から考えると、有り得ないと思った。

しかし、実際には、昨日の夜、マリアとクラウドを縛って、ナギを連れ去っていったのだ。

今回は、ハヤテとナギが出会ったときみたいな、誘拐未遂ではない。誘拐事件を起こしたのだ。

しかし、マリアには、今までのハヤテの行動を見てきて、今回は何かが違うようにも見えた。

昨日、クラウドと話したときには、そんなこと、全然気付かなかった。

しかし、今、冷静になって考えると、あんな事件を起こすような性格ではない。何かがハヤテの中に起きたのではないかと考えた。

いつの間にか、時が流れていた。

「うっ…」

ハヤテが、うめいた。

「ハヤテ君!？」

「マリアさん…。」

「大丈夫ですか。」

マリアは、いつものようにハヤテに接した。

昨日の事件があったのにも関わらずだ。

「ええ。それよりも、僕は一体?」

ハヤテは、そうマリアに尋ねた。

「えっ、まさか、ナギを誘拐して、SPに倒されたことを記憶していないのですか。」

「マリアとハヤテは驚いて、二人とも頭の中が真っ白になった。」

『まさか、僕が、お嬢様を誘拐？何かの間違いだよな。』

『ハヤテ君、本当にナギを誘拐したの知らないのでは。しかし、昨日のハヤテ君は何だったのだろう。』二人はしばらくの間黙ってしまっただ。

「マリアさん…」

ハヤテが静まり返った部屋で言い始めた。

「…僕が、お嬢様を誘拐したのであれば、執事を今日限りで、辞めさせていただきます。借金については、全額、僕が自分の命に掛けて完済させるので、借用証なり発行してください。」

そのハヤテの言葉に、マリアは力が抜けそうになった。

しかし、残っている力を振り絞って、こう言った。

「ハヤテ君は、このまま執事を続けてください。」

「でも、僕は犯罪者ですよ。お嬢様に初めて会った時だって、僕はお嬢様を誘拐しようとした。そんな僕に救いの手を差し伸べてくれたお嬢様をまた…。」そうハヤテは反論した。

「ハヤテ君はいつも、マイナスの方向にしか考えないですね…。」

マリアはハヤテにこう言った。

「…ハヤテ君は、一流の執事になろうとして、頑張っています。しかし、自分の中では、一流の執事になれてないと何処か、引っ込み思案になっていませんか。私が見ている、ハヤテ君はナギの一流の執事です。世界一のナギの執事です。ハヤテ君が辞めてしまったら、ナギの執事は誰がやるのですか。ナギの執事はハヤテ君にしかできないのですよ。」マリアはそれを言いながら、目から涙をちらつかせた。

それにハヤテは何も言えなかった。

しばらく、またシーンとした空気が漂った。

そして、ハヤテは言った。

「少しだけ、休みをもらってもいいですか。」  
それに対して、マリアはうなずいた。

翌日の早朝、まだ太陽はのぼっていない頃、こっそりとハヤテは屋敷を出た。

「はあ、しかし、屋敷を抜け出したけど、これからどうすれば……」  
ハヤテは行き着くあてもなく、街をさまよつことになった。  
しばらく、歩いているとふとあることを思い出した。

「あつ、そういえば予備校にまだ、受付して以来、一度も足を運んでいない。白皇の進学のためにも、少しは勉強を進めなければ……」  
それを思いついたハヤテはとりあえず、予備校へと向かった。



## 第25話 責任感と・・・（後書き）

本当は、19日に投稿する予定でしたが、日をまたいでしまいました。しかし、今回は、当小説の中で一番の山場ともいうべきところだと思えます。

是非、楽しめていただければ、幸いです。

そして、感想や評価をどんどん送ってください。励みになると思います。

では。

## 第26話 Hi、マイケル。調子はどうだい？

あれこれあって、暫くの間旅に出ることとなったはやては予備校に  
ついた。

予備校に通うことになっていながら、あれこれあって、結局、受付  
以来、一度も予備校には行つてなかった。

担当の先生も知らず、とりあえず、受付に向かった。

「すみません……。」

ハヤテが受付で会員証を見せようとした瞬間、顔から表情が消えて  
しまった。

「は、半魚人!!!」

あきらかにどこかのほのぼの日常アニメで情熱の いバラを歌って  
いる半魚人と呼ばれていた女性とクリソツであった。

しかし、まさか、その人物が確かめる訳にも行かず、いつもの営業  
スマイルを作り、この場を乗り切ってしまうとおもった。

「すみません。実は、受付以来、一度も通つてなかったのですが……。」

そうハヤテ言うと、先方から辛口なコメントが帰ってきた。

「何、退学するの!!!」

「いえ、そうではなく、担当の先生に会いたくて……。」

「そうですか。それでは、ちょっと調べてきます。」

そう言つて、受付の人は奥に行った。

「はあ……。」

なんだか、受付だけでこんなにつかれるとは思つてもいなかった。

「お待たせしました。残念ながら、今、現代文の小杉しかおりませ  
んでしたが……。」

「分かりました。では、小杉先生に会つてもよろしいでしょうか。」

ハヤテはそう言つて、受付の人に小杉先生のところに案内してもらつた。

しかし、そこには、長蛇の列が待ち受けていた…。

そして、ハヤテは最後尾に並んで、1時間ほど待った。

そして、ようやくハヤテのところまで来た。どうやら、ハヤテが一番最後に並んだらしく、後ろには誰もいなかった。

「こんにちは、」

そう言つた瞬間驚いた。

あきらかに、塾講師ではない。なにかアメリカのネバーランドから元黒人が来日して講師をやっているような錯覚を思わず、覚えてしまった。

「こんにちは。君の質問は何だい？」

華麗に回転して、椅子に座った。

「いや、じつは、先生の授業を受けようとしたのですが、いろいろあつてそれどころじゃなくなつてしまつて…。せめて、何かを教授してもらおうと来たのですが…。」

「そうか。まずは、君に聞いておく。僕のことを差別してないかい。」

「えつ、それはないですが…。」

「いや、君にはその傾向がある。いくら表情でごまかそうとしてもダメだよ。」

「すみません…。」

確かに先生の言つとおりだった。自分の心の中に先生に対する偏見があつた。

「現代文という教科には、まず自分の思い込みというのは禁物だ。出題者や作者の意図を考えて、問題を解くというのが、大学受験の現代文だ。そして、君は、先生のことを思い込みで差別をした。まずは、その点を忘れないで。」

「はい。」

「そして、君は一体、予備校に今まで来なかつたんだい。」

「それは、いろいろと・・・。」

「色々じゃ駄目だ。僕が君の悩みを聞いてあげるから、素直に話さない。」

「実は・・・。」

そして、ハヤテは事情を説明した。自分の気がつかないときに、お嬢様を誘拐してしまったこと。そして、これから旅にしようと思っていることを。

「そうか。自分を見つめ直すために旅に出るのか。それはいいことだ。旅をすることで、君の古い思い込みが解消されるといいね。」

そして、気がつかないときに誘拐してしまったという怪現象。それは、もしかすると今の科学では解明されていない未知の現象の一つだろう。先生の知識でも解決方法はわからないけど、いつかきつと解決されることを期待しているよ。」

いつか解決することを君の心の奥底で願っているんだ。」

そうすれば、絶対、叶えてくれるはずだ。」

大学受験というものもそうなんだ。大学に受かるということを感じていれば、意外と叶ってしまうことなんだ。」

科学的ではないと言われてしまいかもしれないが、とある実験で、勉強に対する意欲を意図的に操作して、どのような影響があるかを調べたんだ。そうしたら、プラス思考をしていた人間のほうが学力の伸びが大きかったんだ。それは、多分、何をやるにしても効果あると思う。」

君も、旅によつて何かを得られたら、それはすばらしいこと。とりあえず、僕が最初に配る冊子をあげるから、当分の間はそれを勉強して、そして、旅行でも何か勉強をしてくれれば、それでいい。」

そう言われ、ハヤテは泣きそうになった。プリントをもらって、ハヤテはとりあえず、塾をあとにしたのだった。」

第26話 Hi、マイケル。調子はどうだい？（後書き）

ということでお待たせしました。

今回は、笑いの回なのか、それともお説教の回なのか、微妙ですね。ともかく、ついに、ハヤテが、一人旅に出る方向に進もうとしてますが、それを遮るような出来事が起きる予定です。

まだ、執筆してませんが、、、、さて、話は変わって、個人的な話に。

実は先日、熱海に行ってきました。

熱海といえば、伊豆にも近い（伊豆の玄関先つてところです。玄関口は、伊東だとよく言われます。）ところ。そして、伊豆といえば、三千院家の邸宅があるという設定になっています。

ということ、下田も行ってみました。寂れてました！

季節が悪いのか、それとも、伊豆旅行が過去のものとなって、人が来なくなってしまったのか？

気になるところです。

では、また次回。

## 第27話 ヒナギクの鬱

ハヤテが事件を起こしたあと、白皇学園には一度も行ってなかった。そんな中、白皇学園で一際、ハヤテのことが気にかかっていた人物がいた。

それは、ヒナギクであった。

ヒナギクは朝、クラスに入るとハヤテとナギの席を見て、こう呟いた。『はあ、ナギは屋敷でゲームとかしているんでしょうけど、最近ハヤテ君まで学園に登校してないわね。何かハヤテ君に不幸でもあったのかしら。』

よく考えると、今まで、ハヤテにも、散々不幸がかぶさっていた。しかし、学校を休むまでの大不幸はなかった。

『うっ、なんで私、ハヤテ君のこと考えているんだろう。それよりも、学校生活のほうを考えないと。』

そうは思ったものの、ヒナギクはその日、いまいち他のことに力が入らなかった。

それ程、ハヤテのことが気にかかっていたのである。

そして、放課後、ついに耐えきれずに、ヒナギクは、三千院家に来た。

三千院家では、マリアに出迎えてもらった。

「こんにちは、マリアさん。」

「ええ、ヒナギクさん、こんにちは。今日はどうしたのでしょうか。」

「じつは、ハ……。」

ハヤテ君のことを気にしているから来たというのは失礼な気がして、もう一度。

「ナギのことが心配で来てしまいました。」

「そうですね。ナギはあいかわらず元気になっていますよ。ただ……。」

そうマリアは言いかけた。

「どうかしたのですか。」

ヒナギクはそうマリアに聞いた。

「いや、別になにも。ともかく、ナギのところへ。」

そう言つて、マリアはヒナギクをナギのところへと連れていった。

「ヒナギクさんがお見えになりましたよ。」

「わかった。」

とナギが返事をした。

そして、ナギとヒナギクはお茶を飲みながら談笑をし始めた。

たわいも無い話をしながら、ヒナギクはハヤテのことが気になつていた。

しかし、ハヤテの姿は見当たらなかった。

そして、ついにヒナギクは我慢ができなくなつて、ナギに聞いた。

「そういえば、ハヤテ君の様子が見えないけど、どうしたの？。最近、学校でも見かけなかったし…。」

それに、ナギはこう答えた。

「ハヤテは旅に出た。」

「旅に？」

それにヒナギクはビックリして聞き返してしまった。

『なぜ、ハヤテ君が、ずっと、ずっと、一緒に近くに居られると思つたのに…』

そう、ヒナギクは思った。

いや、もしかすると、ナギも思つてるかもしれない。

「ナギは、ハヤテ君がいなくて、寂しくないの？」

そうヒナギクが訊いた。

しかし、ナギは、

「うーん…。」

という曖昧な答えしか返して来なかった。

ヒナギクは直感した。ナギとハヤテの間になにかあったと。

すぐにヒナギクは、事情を訊いてしまった。ヒナギクの心がそうし

ただ。

それにナギは、この前、ナギが誘拐されたとき、ハヤテも加わってしまったことを話した。

「まさか。」

ヒナギクは、啞然とした。

今までのハヤテのイメージが崩れた。

ヒナギクは、言葉を失ったまま、家へと帰宅した。

「なんで、ハヤテ君が……。そして、なんで私はあんな少年のことを……。」

ずっと自問自答していた。

しかし、心のどこかで、

「いや、ハヤテ君は、そんなこと、絶対しない。」

という想いがあった。

ヒナギクとしては、そうあってほしかった。

その頃、もう一人、変態的なほど、心配していた人物がいた。

「お嬢！！、俺の、俺のハヤテは、ハヤテはどうしたんだ。」

「虎鉄君、そんなに泣かないでよ……。」

泉は、虎鉄の対応に困っていた。

虎鉄のこのような嘆きは、今日で3日目である。

そして、泉は、困り果てて、三千院家に電話をした。

「あつ、もしもし、ナギちゃん？」

「そうだが、何の用だ？」

「ハヤ太君で今、どうしてるの？」

「まさか、泉まで、ハヤテのことが……。絶対、ハヤテは……。」

「違うよ……。ナギちゃん。虎鉄君が心配しているんだよ……。」

泉は強く否定して、虎鉄が心配していることを言った。



ナギはいつもならば、虎鉄を批判するところだが、今日はその気がないらしく、普通に理由を説明しはじめた。

「そうか、実は、私を誘拐したことで、今、頭を冷やしに旅に出ている……。」

そのことを泉の横で張り付いて聞いた虎鉄は、急いで自分の部屋に行って、旅に行くための準備をした。

「ちょ、虎鉄君、何処に??」

泉が受話器を持ったまま、虎鉄に言ったが、虎鉄は一言だけ。

「ハヤテを探しに行ってくる。寝台特急「北陸」や急行「能登」よりも、ハヤテの方が大事だ!!」

そう言って、虎鉄は、瀬川家をあとにしたのだった。

「おい、どうした、泉??」

「いや、なんでもないよ。ナギちゃん。じゃあね。」

急いで泉は電話を切ったが、もうすでに手遅れだ。

そして、虎鉄は、急いでハヤテを追いかけるのであった。

## 第27話 ヒナギクの鬱（後書き）

こんにちは。ついに、ついに、虎鉄が動き出してしまいました。どうなるんだろう・・・。

まあ、筆者としては、なんとしてもハヤテを見つけだしてほしいです。（なんじゃそりゃ。）

そして、前回と同様、個人話となるわけなのですが、また、旅行に行ってきました。

いやあ、バス好きな先輩がいて（どんなシュチュエーションだよ）、茨城の袋田の滝などを貸切路線バスで回る旅というのに、行ってきました。

普段、路線バスなんか貸し切るのは、至難の業だと思つのですが、それを実行するっていうのは凄い気がします。

面白かったですね。バス旅。

それでは、また。

## 第28話 旅に情けは必要かも?? (前書き)

最初に、4月1日に実施した、第28'話については、この話とは全く関係なく、さらに、連載が完結もしていません。(エイプリル Fool企画として、偽の終わりを公開しました。)もしも、完結したと完全に誤解をした方がいらっしやいましたら、大変申し訳なく思います。

## 第28話 旅に情けは必要かも??

ハヤテは、みどりの窓口にいた。

「はい、次の方。」

ハヤテの順番が回ってきた。

しかし、ハヤテは何処に行けばいいのかわからなかった。

「どうしました。」

窓口の駅員さんが、聞いた。

「じつは、行き先が決まってまないんです。でも、旅に出たいんです。」

しばらく、駅員は黙り込んだ。

「一筆書き切符でご存じですか?」

「いや。」

「一筆で乗車券を発行することで安く済ます制度なのですが、こういうルートはいかがですか?」

と言って、駅員はメモ帳にルートを書いてくれた。

そのルートは、

まず、お茶が水を出て、中央線で新宿に、東海道本線に乗り換えて、米原へ。

その後、北陸本線で福井や金沢を通って、長岡（宮内）から、上越線と高崎線を使って、帰ってくるというルートだった。

「どう?」

駅員はハヤテに尋ねた。

「ああ、いいですね。」

ハヤテはそう答えた。

「えっと、14070円ね。大人料金は。」

そう駅員は答えた。

そして、ハヤテは、その切符を手にした。

一方、屋敷を飛び出し、ハヤテを血眼ちまなこになって探している虎鉄であったが、世界は広い。

そこから一人の少年を探し出すのは不可能に近かった。

そして、いつの間にか、道を探すのに疲れたような顔をして歩いていた。

『どうしたら、ハヤテに会えるのだろうか。』

そう思ったとき、あることを思いついた。

「そうだ、GPSだ！」

しかし、ハヤテの携帯のGPSを虎鉄は調べられない。虎鉄は、マリアならわかるのではないかと思って、急いで三千院家に電話をかけた。

「もしもし、マリアさんですか！」

「は、はい。マリアですけど。虎鉄君？」

「そうです。早急なのですが、ハヤテ君の居場所、教えてください！」

それを言われたマリアは困惑した。

『まさか、ハヤテ君が一人で旅しているのをいいことに接近しようとしているんだわ。しかし、居場所を教えない訳にも行かないし……』

悩んだ末、結局、マリアは虎鉄にGPSを使って居場所を教えたのだ。

そして、虎鉄は、ハヤテがお茶が水にいることを知ったのである。

「待ってる。ハヤテ！」

急いで、急行で高田馬鹿まで行った。

急行に乗れば、たかが一駅である。

そして、電車を乗り継ぎ、ついにお茶が水に到着した。

しかし、お茶が水についたものの、ハヤテの姿は見当たらない。

「くそつ。遅かったか。」

虎鉄は、悔しそうな顔をした。

しかし、よく考えると、お茶が水には、2つ改札口がある。一つは、虎鉄のいる先頭側の改札口。もう一つ、後ろにもあるのだ。

それが虎鉄の頭の中をよぎった瞬間、虎鉄は同時にもう一つの改札口に向かった。

そして、ついにハヤテを見つけたのだ。

「おーい。ハヤテ！」

ハヤテが近くの書店で買った時刻表を読んでいたとき、目の前に、世の中、一番会いたくない相手に遭遇してしまった。しかも、遠くからこっちに駆けてくる。

そして、虎鉄とハヤテは予期せぬ再会を果たしたのだ。

「ハヤテ、お前、学校に来ないと思ったら、こんなところで何やってるんだ。」

「あなたには関係ないでしょ。第一、どうやってこの場所を……」

「それは、愛のレーダーでさ。」

もう、ハヤテとしては、一刻も早く過ぎ去りたかった。

「そういえば、なんで時刻表を持って、ずっと突っ立ってるんだ？」  
虎鉄にそう聞かれたハヤテは、

「いや、時刻表を見ていたんですが、いまいち上手く行けなくて……」  
そう、時刻表というものは、数字の羅列である。

1路線しか載らないのであれば、そんなに複雑ではないが、何回も乗り換えをすると、ものすごく難しいのである。

しかし、虎鉄は、鉄道オタクである。

「じゃあ、俺が行程を組んでやるよ。こういうの、俺のほう得意だろうし。」

そして、自然にハヤテと虎鉄という、いかにも危険があふれたメンバーで旅が始まるうとしていたのである。

## 第28話 旅に情けは必要かも?? (後書き)

さて、ついに、旅行が始まるうとしてます。

役者も揃ったと言うことで、今後の展開が楽しみです。

ところで、作者として思うのですが、こういう話はあるのかなって悩んでいます。

最近では、「鉄子の旅」という漫画が出て、鉄道ブームだと言われていますが、あくまでも読者は限られた人しかいないような気がします。

旅といっても、なんか中高年のものというような感じもしますし、この話のターゲットとしている年齢に合わないジャンルのような気もしています。

どうなんだろうか……。

もしも、今後の旅編が楽しめたと说着てもらえるなら、作者としては万々歳です。

では。また次回。

## 第29話 旅のはじまり

そして、ハヤテと虎鉄は東京駅へと来た。

「この切符だと、今度は東海道線で米原まで下ることになるんだな……。」

虎鉄は時刻表を見ながらそう言った。

「で、熱海に13時58分に着く奴だと、ちょうど3分前に島田行きが行ってしまうから、その次に接続がいいのが、東京を12時33分発の快速アクティーがいいのか。」

そして、時刻表を閉じた。

「よし駅弁を買うぞ。」

凄く張り切って、ハヤテのいうことなど無視に近い形となっている虎鉄。

「お、ちよつと待つてください。」

張り切り調子のハヤテは後を追うだけだった。

そして、駅構内の駅弁屋へ。

「うわあー。いっぱい駅弁ありますね。」

「あつ、そっちの駅弁は、東京の駅弁じゃないからね。」

そう、東京駅などの主要な駅では他の駅の駅弁も販売されていたりするのである。

「じゃあ、俺は、この浅草今半の牛肉弁当で。」

「じゃあ、僕は、この、まい泉のひれかつのサンドで。」

二人は会計をした後、お店を後にした。

そして、ホームに上がった。

「まだ、20分あるのかあ……。」

「そうですね。」

「そつえば、服は持ってきたのか……。」



「そりゃそうですよ。」

「いや、匂いが…。」

そして、それにハヤテの拳が飛んだとか…。

「いたいなあ…。」

流石に執事をやっているだけあって、こんなことで病院行きになることはない。

「まむなく、9番線に、快速、アクティ―、熱海行がまいります。

黄色い線の内側にさがってください。この電車は…。」

そんなこんなで、電車がホームに入線してきた。

「ハヤテ、前行くぞ。」

それに、ハヤテは、虎鉄が一番先頭で運転席を見るのではないかとおもった。

しかし、それは違っていた。

先頭付近に行くと、座席が東京の電車とは違って、窓を挟んで、座席が向い合っている。

そして、先頭に来た意味がそこでようやくわかった。

「よし。これでボックス席取れたぞ。ラッキー。」

虎鉄はそう喜んだ。

「長旅には、やっぱり、ロングよりも、ボックス席だな…。」

実は、最近の東京近郊を走る電車は、一番先頭の2両か、中間の9号車、10号車、一番後ろの2両しかボックス席が設置されていないのである。

そこで、虎鉄は先頭車へ来て、ボックス席を取ったのである。

やっぱり、鉄道の知識があるというのはこういう時は便利である。

そして、12時33分、ハヤテたちを乗せた電車は東京を立ち、一路、熱海へと駆けていったのであった。

## 第29話 旅のはじまり（後書き）

さて、いよいよ旅編のはじまりとなりました。

今回の話は、鉄子の旅に近いのかもかもしれません。

もしかすると、つまらなかつたかもしれない。

しかし、駅弁を探すのが大変でした。

ネットで調べたのですが、調べないと出てこない自分にちょっと…。

ということ、今回は、一回、この話から外れるとか…。

（てか、本当は、この話は、昨日発表する予定でしたが、なかなか進まなくて、今日発表となりました。今後も、どんどん遅延するかもしれないがよろしくおねがします。）

### 第30話 ハヤテは西へ・・・

電車は、多摩川を渡り、川崎に突入した。

「ああ、懐かしい。川崎。昔、工場のバイトで、来ました。」  
そうハヤテは言った。

法律上ではいけないはずだが、なぜかこの少年は、小さい頃から働いて、生計を建ててたのである。

そして、電車は川崎駅でお客を乗せた。

先頭のこの車両にも、1人のトランクを持った若い男の人が乗ってきた。

「ここいいですか。」

そのおばあさんは、ハヤテたちの座っていたボックス席に座ろうとしていた。

「いいですよ。」

ハヤテはそう言った。

虎鉄としては、せっかく、ハヤテと二人で座れたということに一種の感情を表していたが、それを、この男の人に邪魔されてしまったことを心の中で悔やんだ。

「しかし、今日はいい天気だな。あんちゃんたちは何処行くの?。」  
そう男の人は、ハヤテたちに聞いた。

「これから、北陸のほうを一周しようと思つてまして。」

「ああ、それはいいねえ。二人で楽しんでおいで。俺も、北陸は半年前に行ったなあ。金沢なんか、雪景色で綺麗だったよ。」

「ありがとうございます。お兄さんは。」  
ハヤテが若い男の人に訊いた。

「ああ、私は、これから、東海道線で国府津まで行って、御殿場線ごてんばせんに乗り換えて、色々と見て、それから大阪のほうに向かうんですよ。僕、旅が好きでね。」

「そうなんですか。」

ハヤテはそう言った。

「うん。特に、今日は天気いいから、御殿場線なんか、富士山が綺麗に見えると思うんですよ。」

「へえ。僕たちも行きたいですね。」

「切符見せてみ。」

ハヤテは切符を見せた。

「ああ、この経路じゃあ、だめだな。」

「どうしてですか。」

ハヤテは訊いた。

「実は、東京と名古屋、大阪の都市近郊以外は、一部を除いて、切符に書かれた通りに電車に乗らなければいけないというふうに決まってるんだ。」

「へえ。じゃあ、御殿場線は乗れないですね。」

「残念だけど、そういうことだね。」

ハヤテは残念そうな顔をした。

「でも、東海道線も景色はいいからね。」

そう男の人は言った。

そして、その後も他愛もない話をした。

その人の旅行での人との交流や、景色の美しさなど。

ハヤテは少し、これからの旅が楽しみになった。

ついに国府津駅に電車は着いた。

「じゃあ、気をつけて。」

そう男の人は挨拶をして降りていった。

そして、またこの二人の旅が始まったのだった。

しかし、空気はあまりよくなかった。

ふたりとも話すネタがなかった。

そんなことはお構いなしに、電車はどんどん西に向かっていった。しかし、電車が西に走ると同時にハヤテの体にも少しずつ変調があった。

誰かに、自分の魂を身体から押し出されて、浮いてきているような、そんな感じがした。

景色はすっかり変わって、山と海の境界線をトンネルと橋を使って、電車は走った。

景色はいいのに、ハヤテはだんだんとそれどころになくなってきた。

一体、ハヤテの身に何が起きているのであるつか。

第30話 ハヤテは西へ・・・（後書き）

はい。前回の言ってたのとは違う展開になってしまいました。

実は、この旅編、あんまりネタが思いつかないんです。

すいません。愚痴をこぼしてますね。

もしかすると、旅編を思いつかないのは、気温が暖かいからなのではないかな。よく分かりません。

では、また次回。

### 第31話 犯罪者、綾崎ハヤテ！

熱海で電車を乗り換え、今度は島田行きに乗車した。

しかし、ハヤテは相変わらず、虎鉄と喋れないほど、体調が悪かった。

「大丈夫か、ハヤテ。」

虎鉄も、体調が悪化していくハヤテの様子に気がついていて。

しかし、ハヤテは虎鉄の問いかけに気づかないほど、衰弱仕切っていた。

しかし、電車はトンネルの中で、また駅に到着するまでに時間が掛かる。

そして、ついにハヤテは記憶が遠のいてしまった。

「大丈夫か！しつかりしろ！」

虎鉄はそれしか言えなかった。

そして、電車はついにトンネルを抜けた。

そのときだった。

ハヤテは目をガツと開いた。

まるで、何かにとりついていているように…。

そして、電車はそれに合わせるように函南駅に到着した。

ハヤテは、名前のように電車から素早くホーム上に降り立った。

「待ってくれ、ハヤテ。」

虎鉄も急いで降り立った。

それと同時に電車のドアは閉まり、発車した。

しかし、ハヤテは既にどこかに行ってしまった。

いったいハヤテが何をやりたいのか、虎鉄には想像がつかなかった。

ところ変わって、とある家…

「ついに、ついに噂の3Dテレビを買ったぞ。早速、水戸黄門を見るところか」

とおじいさんは一緒に暮らしているおばあちゃんに言った。

「私には、どこかいいのか、さっぱり分からないわ。」そう言っておばあさんは台所へと向かった。

しかし、そんなことも気にせず、おじいさんはテレビに熱中した。しかし、そのとき、ちょうど、屋根の上ではハヤテが追いかけていた。

そして、ハヤテはテレビアンテナを間違って倒してしまったのだ。テレビで見たいシーンが見られなかったおじいさんは、家を外を覗いて、ハヤテたちを見つけた。

そして、こう叫んだ。

「わしの、わしの楽しみにしていた女忍者の入浴シーンをどうしてくれるんだ！」

しかし、それは、ハヤテには伝わらず、その代わりに、おばあさんが反応して、おじいさんを叱りつけた。

しかし、そんな出来事すらハヤテは分からなかった。

ハヤテに取り憑いた何かがそうさせたのであった。

警察にもその後、すぐにハヤテのことは通報された。

警察も屋根上や電線などを破壊して、どこかに向かうハヤテを放置できない。

立派な犯罪だ。

そして、ついにハヤテは、警察の懸命な追跡によって捕まった。

「離せ！離せ！」

ハヤテが取り押さえられたとき、完全にそれはハヤテじゃなかった。パトカーに乗せられて、警察の留置所へハヤテは放り込められた。

「ここから出せ！」

ハヤテは必死になって柵から出ようとした。

しかし、手錠をしてる以上、それは不可能だ。



暫くしてそれが分かったのか、ようやく落ち着いた。

「ようやく落ち着いたか…。そしたら、明日から聴取を始めるか…。

」  
担当の刑事はそう言った。

その頃、虎鉄はハヤテが見つからず、どうしようもなくなり、交番で、捜索届を手続きした。

そして、虎鉄は近くで旅館を見つけ、そこに一晩泊まることにしたのだった。

### 第31話 犯罪者、綾崎ハヤテ！（後書き）

お久しぶりです。

投稿がとて遅くなりました。

色々と忙しくなってきたりまして、今後は二週間に一回とかになつてしまふかもしれません。

ところで話は変わって、個人的な話に変わります。

綾崎ハヤテと言えば、三千院なぎや、西沢歩、桂ヒナギクなどから好かれていますよね。（友達を超えて、恋愛の意味で好かれていますね。）

で、何を話したいのかというと、先日、とある友人に会って、話してきたのですが、あまりにもイケメンになつてて、自分が小さくなりそうでした。

もしも、ハヤテみたいな男女比率がほぼ半々のところに存在したら、すぐにハヤテと同じ状況ですよ…。きつと。

そう考えると、ファッションに疎いし、イケメンでもないし、二次創作に夢中になつてる自分は、、、先が思いやられますね…。

ついでに、その友人から教わったことも数知れず。

例えば、この小説を作る際、ネタ元や運賃計算（ちゃんと運賃計算したものを小説に掲載しました。）は彼とかと行った旅行などを元にしてたりします。

自分だけだと、関東近郊に籠もって（てか、それが普通ですよね。）

、関西だの、北関東だの行きませんからね…。

あつ、長くなつてしまいましたが、そろそろ愚痴みたいなものはこちらで。

### 第32話 不思議な刑事

「あれ、ここは？」

目を覚ますと、何故か無味乾燥な空間にいた。

「あれっ、前に柵が…、まさか、これって、飼い犬ごっこなのか。」  
なんか、変なことに気づいてしまったハヤテ。

しかし、現実にはハヤテを犬に出来る人は、  
結構いるが、ここまでするのは国家権力である警察だけである。

しばらくして、ようやくハヤテは警察に捕まって拘置所にいることに気づいた。

「どうして、」

ハヤテはそこが謎だった。

ハヤテは、函南の駅についた時には、既に記憶がなかったのだ。

ハヤテは拘置所の静かな中で考えた。

殺人でも起こしたのではないか…。

前、殺人を無意識に行ってしまうということを聞いたことがあった。

そして、その殺人犯は、両親が離婚して、複雑な環境で育ったと。

ハヤテも、両親はいるものの、小さい頃から、複雑で過酷な環境で育ってきた。

「自分はやはり、この世に存在してはいけないものなのではないか…。」

そのような思いがこみ上げてきた。

しかし、それだけ考えていても時間が立つばかりだ。

そんなこんなで朝がやってきた。

「引き続き、取り調べをはじめます。今日は、東京の警視庁から来た刑事に取り調べてもらおう。」

そうハヤテに警官は言った。

「えっ、担当の刑事じゃなくても取り調べていいのですか？」

しかし、ハヤテの言葉など聞かずに、ハヤテを取り調べ室に連れて行った。

「私が東京の警視庁の刑事、かみのげすし上野毛碓四だ。」

「はあ、カミノケウスイ？」

「違う！」

刑事はハヤテの記憶力のなさに激怒した。

しかし、ハヤテの目は、上野毛の頭に目線がいつていた。

さっきの激怒で、髪の毛の部分が少しズレた。

植毛の技術があるのにである。

しかも、年齢も、年取った威厳のある刑事ではなく、どちらかという、下町のチンピラである。

「では、綾崎ハヤテの事情聴取を始める。昨日の4時すぎに、屋根上を走ったことによる、器物損害及び、公務執行妨害の罪を認めるか！」

「いや、僕、実は、昨日の午後の記憶がないんですよ…。」

ハヤテはいつもの営業スマイルで真実を話した。

しかし、そんなものは通るわけもない。「お前、天下の警視庁をなめとんのか。こらー。」

そう言って、刑事は、机を叩いた。

「しかし、おまえはん、イケメンちゅうか、女顔だな…。」

「それと事件の何が関係あると…。」

「いや、もしかすると、自分の顔を見て、発奮したとか。」

「そんなのありえないです。」

ハヤテは、刑事の推測をきっぱりと、切った。

「しかし、あれは、確実に人のやることじゃないよな…。忍者みたく、家の屋根に登って、通過したりするなんて。」

そう刑事は考えた。

「…精神鑑定出すぐらいの案件なんだろうけど、今見たところだとその必要もなさそうだしな…。」そうして、刑事は悩み始めたのだ。

つ  
た。

### 第32話 不思議な刑事（後書き）

すいません。大変遅くなりました。最近は色々ありまして、小説の更新がはかどっていません。

前回のあとがきに何を書いて終わらせたのかすらも、覚えてませんとりあえず、今後の更新も遅くなると思います。よろしくお願いします。

### 第33話 諦めと企み。

「ははは。ははは。」

神殿のようなところに、一際、聞こえるような声で笑っている人がいた。

「まさか、こうなるとは、私も思っていなかった。」

そう言つて、近くの椅子に腰掛けた。

「しかし、あの少年も馬鹿だな……。私の思うがままに動いてくれる。」

そう言つて、近くの鏡を見た。

そこにはハヤテたちの姿が映っていた。

「はあ、これで、人類の文明も終わりだ。醜い終わり方だな。しかし、これは、人間が自分で首を締めただけだ。」

そう言っている、一人の少年が近づいてきた。

「どうですか、パーティオンさま。」

「ははは、これを見てみ。」

そして、少年も鏡を見た。

「うわあ……。かわいい……。」

その少年は言つた。

「はははっ。まあ、神に仕えさせるには調度良いだろう。」

「でも、なんで、人間を滅亡させよう。」

「それはだな。人間が、知恵と憎しみを増やして行ったからだ。」

「どういふことなんですか、それは。」

「ソフィア。お前には分からないだろうが、人間は文明を発達させてきた。しかし、今、人類は、滅びなければならぬ運命にあるんだよ。それは、18世紀から始まった、産業革命、そして、自由主義や、科学に発展が考えられる。」

「それは、一体、なんなのですか。」

「ああ、人間は、大量にモノを作るために、そして豊かになろうと

いう幻想にとらわれて、他の人や動物、自然を破壊してきた。自由主義を世界中に推し進めて、そして、ある国は、世界の中心になり、ある国は、それによって国民が飢え死にしそうになった。また別の国は、それを必死に食い止めようとしたが、力不足で、人々は争い、死んでいった。また、精神的にもダメージを受けた。人々はそうやって、自由を求めながらも、自分がい上がって、他の者を捨てることを繰り返した。

そんな不条理な世界を、この神の世界では求めていない。なぜ、人間は、いつまでたっても、仲良くやっていけないのか。なぜ、ある人たちはその心理を追求しようとするが、なかなかできない。それは、もしかすると、心というものを与えたからかもしれない。

そんな動物を生きさせておけば、いずれかは、地球や宇宙の隅々まで破壊されて、やつらも自滅してしまっただろう。

その前に、私たちがそれらを消し去らなければならないのだ。たとえ、真理に近い人でも、心をもっている限りはな……。」「  
そう言い終わると、少年は納得した。

そして、パティオンは、一眠りしはじめたのだった。

その頃、まだハヤテの取調べがつづいていた。

取調べが終わったあと、ハヤテは、面会者がいることを知らされた。

「虎鉄さん。」「

「ハヤテ、」

虎鉄は、ハヤテを見た瞬間、泣きくずれそうになった。

警察も、困っていた。

取調べが進展しないからである。

しかも、アンテナなどの破損はあったものの、住人もだんだん、この件についてはさっさと済ましてほしいというような態度が見えて



きた。

「ちよつと無理があるかもしれないが、保釈してもいいのではないか…。」

そういう声が上がった。

担当の上野毛<sup>かみのけつすし</sup>碓四も頭を触りながら、なくなく承諾した。

東京に仕事が残っていたからだ。まあ、その仕事が残っているのは、今までの事件を溜めているということもあるが…。

そうして、ハヤテは、釈放となり、その後、起訴猶予となったのであった。

### 第33話 諦めと企み。（後書き）

お久しぶりです。

さて、第33話で徐々に方向が決まろうとしています。

どうやら、ハヤテは、何かと戦って、そこで、この作品は完結するとかしないとか…。

最近、多忙なので、終わってくれるのはありがたいっちゃありがたいです。

そして、ハヤテのごとくの3期はやるのかな？

### 第34話 不安の渦の中

そして、ハヤテと虎鉄は、再び、鉄道の旅を始めた。

しかし、その日は、雨がふり、列車に乗っても、綺麗な富士山は望めなかった。

ただ、ひたすら列車に乗っているだけの旅。

しかも、あの騒動によって、ハヤテも虎鉄も、肉体的にも、精神的にも疲れはててしまっていた。

そして、二人の記憶は、どんどんと睡魔によって、どっかに飛んで行った。

「ここはどこだ。」

ハヤテはとある町にいた。

日は傾き、空は夕焼けに染まっている。

まるで、昭和の街にタイムスリップしたような感じだった。

しかし、あたりには、人の気配すらなかった。

しばらく、ハヤテがそこに立っていると、不意に後ろから声が聞こえた。

「お前は、巫女だ。」

「誰だ。」

ハヤテが後ろを振り向いたが、やはり、さっきと同じように、人の気配はなかった。

「ほーら。お前の父と母が、ハヤテが世の中から消えて嬉しがっている。お前は、神の国に引き込まれ、そして、この現実社会から存在を抹消されるのだ。」

「うそだ。そんなの。」

ハヤテはそうおもって、目をつむった。

しかし、すぐに、さっきまでいなかった人の気配を感じた。

そう。ハヤテの父と母が目の前に立っているではないか。

ハヤテを、まるで奴隷のように、小さい頃から働かせた、張本人たちだ。

「ははっ、残念だったね。ハヤテ。お前は、この世に必要なんだよ。なあ、母さん。」

「ああ、お前は、私たちのグルグル回る夢のためにしか存在してない。そして、これで、私たちには、さらに大金が…。」

「はっ。」

ハヤテはようやくやくそこで、現実へと戻ってきた。隣にいた虎鉄は、まだ夢のなかだ。

「まもなく、掛川、掛川です。ドアから手を離しておまちください。」

「

なんだっただらう。今の夢。

ハヤテはそう思った。

ハヤテは、自分に最近起きた、見に覚えの無いことが関連しているのではないかと疑い始めた。

「一体、僕の身体に何が起きているのだ…。まさか、二重人格というものか…。」

しかし、それは、ナギたちも考えたことだ。

しかも、よく考えると、過去から、そのような状態ではない。ここ最近のことだ。

そして、次に考えたこと。

それは、霊に取り憑かれているのではないのかということだった。もし、そうならば、一刻も早く、取り除いてもらわなくてはならない。

電車は浜松へと、近づいていた。

ハヤテは、虎鉄を起こそうとした。

しかし、ハヤテは、虎鉄がどんな夢を見ているのか知らなかった。

ここは、オランダ、田園地帯が広がっている長閑な風景の中に一つの教会が建っていた。

「私たち。ついにここまで来たのね。」

ウエディングドレスを来た人が虎鉄に向かっていう。

「ああ、ここまでの道のりは長かった。いつも、女と勘違いして告白するものの、男だったりした。しかし、三世院ナギが、僕を同性愛というカテゴリーに導いてくれた。そして、ついに今日。結婚式を上げられるのだ。」

そして、ついに、結婚式がはじまった。周りでは二人を祝福してくれる歓声が響いていた。

「ついに、ついに虎鉄君が、結婚式を迎えるなんて。ウーーン。」  
妹の泉が涙を流した。

「よかったではないか。虎鉄君が結婚出来て。しかも、ハヤ太くんと結婚するなんて。これは、動画研究部のビデオとしては最高の出来だ。」

朝風がそう言った。

そして、ついに神父から、あの儀式の言葉をかけられた。

「アナタハ、この綾崎ハヤテをこれから末永く愛することを誓いますか？」

「はい。」

そして、虎鉄は、ハヤテにキスをしようとした。

そして、電車の中で悲劇はおきたのだ。

ハヤテが顔を横に向けて、虎鉄を起こそうとした瞬間、虎鉄が襲ってきたのだ…。

そのとき、1秒間、電車の中に強風の冷房がかかり、時間が止まった。

そして、すぐにハヤテはビンタを一発食らわしたが、ハヤテの心はそれだけでは収まらなかった。

周りは、男同士がキスしているという時点で、身体が硬直していた。そして、徐々に、ハヤテたちの周りから人が消えて行ったのである…。

電車は、浜松に着く手前のことであった。

### 第34話 不安の渦の中（後書き）

お久しぶりです。

大変遅くなり、申し訳ありませんでした。

最近が多忙で、1日があまりにも短く感じられます。

そして、小説は1月の間、全く更新できず、さらには内容がだんだんとあやふやになってきているながら書いたものです。

僕としても、早くクライマックスに持ってきたいのですが・・・。  
なかなかそうは行かないようです。

では、また次回更新時に。

第35話 餃子の消費量日本一といわれているのは、栃木県宇都宮市ではなく、

ヒナギクは、心配していた。

「ハヤテ君。このまま、永遠に会えないんじゃないか…。」  
なぜか、ヒナギクはハヤテのことが気になっていた。

いや、自分でも、ハヤテのことが好きなことは気づいていた。

放課後、ヒナギクは、いつもの剣道部の練習をはじめてサボった。

「ヒナ、帰るのか。」

花菱が声をかけた。

「うん。」

そう言つて、ヒナギクはさつさと歩いていった。

その後姿に、花菱までも不安を覚えた。

『やっぱり、ハヤタ君のことが、気になってしょうがないんだろうな…。』

127

家に帰ると、携帯電話を取り出して、歩のアドレスを開いた。

ともかく、周りが見えなくなっていた。

自分の感情が抑えられなくなっていた。

そして、すぐにヒナギクは、西沢の家へと向かった。

「ヒナさん、どうしたんですか。急に。」

歩は、驚いたように言った。

「歩、ハヤテ君が旅に出ているの知ってる?」

それに、歩は、

「いや、初めて聞いたわ。どういふことなの?」

そして、ヒナギクは、ハヤテが旅に出た事情を話した。

「そうだったんだ…。」



歩は、そう言つて、落胆した。

「ねえ、私たち、二人でハヤテ君を追いかけない？」

そうヒナギクは歩に提案した。

「いや、そんなお金もないし……。」

「でも、もしかすると、ハヤテ君、不幸だから、一生会えないかもしれないよ。」

「それは……。」

歩はその言葉に心配になった。

潮見高校をやめてからしばらく会えなくなったこともあったことを考えると、ヒナギクと行きたかった。

お金さえあれば。

でも、お金が工面できず、結局、ヒナギクの誘いを渋々、断つた。

その頃、ハヤテと虎鉄は、浜松で口論となり、ハヤテの近くに虎鉄がいることができなくなっていた。

仕方なく、ハヤテの後を追うことにした。

ハヤテは、ひとまず改札に向かった。

時間は正午を過ぎたときだった。

「お昼ごはんでも食べるか……。」

そして、目についたのが、うなぎ……。

「うなぎかあ……。いや、うなぎなんて食べたら、お金が無くなって途中で餓死してしまう……。」

うなぎは諦め、その隣にあったラーメン屋に入った。

「はい、いらっしやい。」

店員の声が響く。

ハヤテは、メニューへと目をやった。

「浜松餃子……。そういえば、B級グルメで有名とか聞いたことある

な…。」

ハヤテは、浜松餃子とライスを頼むことにした。

そして、出てきたのが円形に盛られた餃子と中央に居座るもやし…。

「うわー、これはすごい…。」

食べてみると味も美味しく、お腹いっぱいになった。

そして、さきほど、駅ビルの中で購入した小型時刻表を見た。

「あー、この後は…。」

時刻表と格闘しながら、今日の宿泊地を決めた。

「今日は、頑張つて、福井まで行くかあ…。名古屋で泊まってる」と

あとが辛くなるし…。」

そして、また列車の旅がスタートした。しかし、今回はひとりだ。

しかし、後ろの車両で心配そうにハヤテのことを見つめていた人物

がいた。

そう、虎鉄である。

電車は複雑な関係の二人を乗せて、浜名湖と海に挟まれた地区を走つていったのであった。

第35話 餃子の消費量日本一といわれているのは、栃木県宇都宮市ではなく、

大変、お久しぶりです。

前の更新から2ヶ月経ってしまいました…。

久しぶりに書いたので、何か、設定忘れてたり、前の話を見て書いたり…。

次の話も何ヶ月後になるかもしれませんが、これからも宜しくお願  
いします。

### 第36話 新たなる旅人

「あら、ヒナギクさんじゃなですか。どうされました。」

マリアは門の前に立っていたヒナギクをたまたま見かけたのだった。

「あつ、実は、ハヤテ君のことが気になって…。」

「そうですか。確かに、この前も函南で逮捕されて釈放されるとい  
う、運の悪いことがありましたもんね。もしかすると、また何かに  
巻き込まれているかもしれませぬね。」

マリアはそう言った。

「では、ハヤテ君に電話してみましようか。」

「はい。」

ヒナギクはうなづいた。

「では、こんなところで立ち話をしているのもなんですから、屋敷  
の中にどうぞ。」

そして、二人は屋敷の中に入った。

「そういえば、ナギはどうしました。」

ヒナギクはナギのことをマリアに聞いた。

「相変わらず、ゲーム三昧の日々ですが、やっぱり、あの子、ハヤ  
テ君がいなくなってから、昔のナギに戻ってしまいましたね…。ゲ  
ームの対戦相手もないし、相当、落ち込んでいると思いますよ。」

「そうですか…。」

そして、マリアはハヤテの携帯電話に電話をし始めた。

「あつ、ハヤテ君ですか。」

ちょうど、電話がかかってきた時、ハヤテはまだ電車の中にいた。

「あつ、今、電車の中なので、豊橋駅に着いたときに電話かけ直し  
ます。」

そう言って、電話を切った。

「ハヤテ君、なんて言っていました？」

ヒナギクが訊いた。

「まだ、電車の中だそうで、豊橋駅に着いたら電話すると…。」

「そうですか。」

手がかりが不確かだったが、もう我慢できなくて、三千院家を後にしたヒナギクは、とりあえず東京駅へと向かった。

しかし、東京駅でヒナギクは迷子になってしまった。

「うわーん。なんで、こんなところで迷うのかしら。てか、この駅の構造が分かりにくいのが原因なのよ。」

一人でブツブツ言っていたが、それでは何も解決しないので、とりあえず周りにいる人に声をかけようと動いた。

「スイマセン。」

「What？」

「えっ。」

一瞬、ヒナギクは驚いた、よりによって外人に声をかけてしまった。

『なんで、私って、おっちょこちょいなのかしら…。とりあえず、

答えを返さない…。』

「えっ、この駅で迷ってしまって、東海道新幹線の乗り場は何処ですか…。」

「Oh、ここをまっすぐ行けば、新幹線の改札あるよ。」

そう英語で返してきた。

なんだか、外人に訊いてしまったことにただただヒナギクは恥ずかしかった。

そんなこんなで新幹線に無事に乗り込んだヒナギクだったが、隣を見るとさっきの外人がいるではないか…。

「あなたは、さきほどの…。」

ヒナギクは英語でそう声をかけた。

「やあ、あなたは、さっき僕に訊いてきた綺麗なお嬢さんですね。」

外人にほめられて、ヒナギクはちよつと顔を赤らめた。

「ところで、あなたは何処へ向かうのですか…。」

「ああ、僕はこれから京都に観光に行くのですよ。」

「そうですか、京都はいいですよね。」

そういう単調な話が続いた。

そして、新幹線は発車していったのだった。

### 第36話 新たなる旅人（後書き）

大変遅くなっています。

更新は、遅いながらも更新しているところとは思っているのですが、今後もよろしく願います。

しかし、小説家になるうの機能が改善されたり、新機能がついたり、なかなか面白いですね…。

ただ、最近では他のサイトも機能がよくなっていますが…。

がんばれ、小説家になるう。

そして、がんばれこの小説。

ということ。次回をお楽しみに。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0127j/>

---

ハヤテのごとく next

2010年11月3日18時26分発行